

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第317集

---

熊谷市

---

# 飯塚古墳群 I

---

県道深谷妻沼線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 5

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



飯塚古墳群 第3次調査全景



第37号土壙 馬埋墓土壙

# 序

埼玉県は「便利で快適な総合交通体系の整備」という基本目標を掲げ、広域的な地域間の交通を促進するため、県道の整備を中心として県内の交通網の整備を推進しております。このたびの県道深谷妻沼線の拡幅工事は、熊谷市備前橋付近の交通渋滞の緩和を図るとともに、安全性を高めるために計画されました。

熊谷市（旧妻沼町）には、通称"聖天様"で知られる聖天山歓喜院長楽寺があり、その東側には古くから飯塚古墳群が広がっていることが知られています。今回、この古墳群の一部に懸る拡幅工事が行われることに伴い、埋蔵文化財の取り扱いについては埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課、県土整備部道路街路課などの関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりました。しかし、やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなり、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は県土整備部道路街路課の委託を受けて、当事業団が実施しました。今回の発掘調査では、古墳1基と古代から中世の溝跡、土壙が発見され、すでに実施した妻沼西部工業団地建設に伴う発掘調査と合わせると、飯塚古墳群全体では20基の古墳が調査されたことになり、古墳群の全貌を解明するための貴重なデータ蓄積の一部を形成することになります。

本書は、このたびの発掘調査の成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また普及・啓発の資料として広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、この発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県県土整備部道路街路課、熊谷県土整備事務所、熊谷市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成17年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 福 田 陽 充

# 例言

1. 本書は、熊谷市に所在する飯塚古墳群の第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表番地、および発掘届けに対する指示通知は、以下の通りである。  
飯塚古墳群 (IIZK 古3次)  
埼玉県熊谷市大字飯塚247-1他  
平成15年6月26日付け教文第2-21号
3. 発掘調査は、県道深谷妻沼線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、岩瀬 譲、永井いずみが担当し、平成15年5月19日から平成15年7月31日まで実施した。
6. 整理・報告書作成作業は、平成17年8月1日から9月30日まで実施した。
7. 遺跡の基準点測量は、(株)東京航業研究所に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は岩瀬、永井が遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
9. 出土遺物の整理および図版の作成は、西井幸雄が主に行い、遺物に関しては大谷 徹が行った。
10. 本書の執筆は西井が行い、I-1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、V及び遺物観察表は大谷が行った。
11. 本書の編集は、西井が担当した。
12. 本書にかかる資料は、平成17年度10月以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
13. 本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏から御教示、御協力をいただいた。記して感謝を表します。  
(敬称略)  
熊谷市教育委員会  
荒川 弘 山川 守男

# 凡例

1. 本書中における X・Y の数値は、日本測地系（旧測地系）による平面直角座標第 IX 径（原点：北緯 36° 00′ 00″、東経 139° 50′ 00″）に基づく座標値（m）を示し、各挿図における方位は、すべて座標北を示している。
2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10m×10m を基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として東西方向西から東へ A～、南北方向北から南へ 1～と番号を付けている。
4. 挿図の縮尺は、各図版中に指示した。

## 【遺構図】

全体図	1/200
古墳	1/80
溝跡	1/60
土壙・井戸跡	1/60

## 【遺物】

土師器	1/4
埴輪	1/3
石製品	1/3
加工痕のある石	1/5

5. 遺構の表記記号は、以下のとおりである。  
SS…古墳  
SK…土壙  
SE…井戸跡  
SD…溝跡
6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高で、単位は m である。
7. 埴輪観察表凡例及び計測表  
○ ここで扱う円筒埴輪とは普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の総称であり、形象埴輪とは図示方法及び観察表の記述方法が一部異なる。

- 挿図の縮尺は、実測図及び拓影図を 3 分の 1 に統一した。
- 表中に使用した記号や略語は各々以下のとおりである。
  - a. 胎土の項目中の分類は下記のことを表す。砂礫の混入の状況は A>B>C の順である。
    - A 径 1～5 mm の小礫を多量に含む。
    - B 小礫、細砂を含む。
    - C 礫の混入は少量である。
  - b. 色調は農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』に基づいている。
  - c. 焼成は器面の観察から下記のとおり分類した。

良好	普通	不良
硬質	普通	軟質
  - d. 外面調整及び内面調整は器表面の主體的な調整法を記し、円筒埴輪のハケメの項目の中でタテ、ヨコはハケメの方向を表す。数値は 2 cm の幅の中に確認できるハケメの本数を記したものである。
  - e. 基部粘土板の重ね合わせは、埴輪を正立させた場合に、基部を右回りに接合させたものを R 接合とし、左回りに接合させたものを L 接合とした。
  - f. 形象埴輪の胎土・色調・焼成・調整（ハケメ）等については、円筒埴輪と同じ基準である。  
○ 備考の欄には特記事項を記した。また、ヘラ記号のある場合は内外面の位置とその存在を記した。
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の 1/50,000、熊谷市発行の 1/2,500 を用いた。

# 目次

口絵  
序  
例言  
凡例  
目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	10
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 古墳	10
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 溝跡	10
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	3. 土壙・井戸跡	20
II 遺跡の立地と環境	4	4. グリッドの遺物	37
III 遺跡の概要	8	V まとめ	38

# 挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第14図 第33～37号土壙、第12号井戸跡平面・断面図	21
第2図 周辺の遺跡	5	第15図 第7号溝跡出土遺物(1)	22
第3図 遺跡周辺の地形図	7	第16図 第7号溝跡出土遺物(2)	23
第4図 飯塚古墳群第3次調査及び第1次調査区遺構概略図	8	第17図 第7号溝跡出土遺物(3)	24
第5図 飯塚古墳群第3次調査区遺構全体図	9	第18図 第7号溝跡出土遺物(4)、第9・15号溝跡第35号土壙出土遺物	25
第6図 第20号墳平面図	11	第19図 グリッド出土遺物(1)	30
第7図 第20号墳墳丘等高線図	12	第20図 グリッド出土遺物(2)	31
第8図 第20号墳断面図	13	第21図 グリッド出土遺物(3)	32
第9図 第20号墳出土遺物	16	第22図 グリッド出土遺物(4)	33
第10図 第7号溝跡平面図	17	第23図 飯塚古墳群概略図(S=1/1,500)	38
第11図 第7号溝跡断面図	18	第24図 有文内屈口縁坏の類例	40
第12図 第8～10・14・15・17・18号溝跡平面・断面図	19	第25図 馬埋葬土壙墓の類例	41
第13図 第13号溝跡平面・断面図	20		

# 表目次

第1表	周辺の遺跡一覧……………6	第5表	第9・15号溝跡、第35号土壙出土円筒埴輪 観察表……………29
第2表	第20号墳出土遺物観察表……………16	第6表	グリッド出土形象埴輪観察表……………34
第3表	第20号墳出土円筒埴輪観察表……………16	第7表	グリッド出土円筒埴輪観察表……………34
第4表	第7号溝跡出土円筒埴輪観察表……………26		

# 図版目次

口絵	飯塚古墳群 第3次調査全景 第37号土壙 馬埋墓土壙	図版11	第20号墳出土埴輪 第9図(表) 第20号墳出土埴輪 第9図(裏)
図版1	飯塚古墳群A区北から 第20号墳北から	図版12	第7号溝出土埴輪 第15図(表) 第7号溝出土埴輪 第15図(裏)
図版2	第20号墳周溝 第20号墳周溝・第7号溝跡	図版13	第7号溝出土埴輪 第15・16図(表) 第7号溝出土埴輪 第15・16図(裏)
図版3	第9・14・15号溝跡 第8・10号溝跡	図版14	第7号溝出土埴輪 第16・17図(表) 第7号溝出土埴輪 第16・17図(裏)
図版4	第20号墳周溝断面 第7号溝断面	図版15	第7号溝出土埴輪 第17図(表) 第7号溝出土埴輪 第17図(裏)
図版5	第20号墳土師器出土状況 第20号墳墳丘断面	図版16	第7・9・15号溝、第35号土壙出土埴輪 第18図(表) 第7・9・15号溝、第35号土壙出土埴輪 第18図(裏)
図版6	第37号土壙 馬埋墓状況 第37号土壙 馬の歯の検出状況	図版17	グリッド出土埴輪 第19図(表) グリッド出土埴輪 第19図(裏)
図版7	第37号土壙 第33・35・36号土壙	図版18	グリッド出土埴輪 第19・20図(表) グリッド出土埴輪 第19・20図(裏)
図版8	第12号井戸跡 第12号井戸跡、第11・12号溝跡	図版19	グリッド出土埴輪 第20・21図(表) グリッド出土埴輪 第20・21図(裏)
図版9	第33号土壙 C区全景	図版20	グリッド出土埴輪・砥石 第21・22図(表) グリッド出土埴輪・砥石 第21・22図(裏)
図版10	D区全景 第20号墳出土土器 第9図1		

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国5か年計画21』に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道深谷妻沼線建設事業に係る埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについては、平成14年10月22日付け道街第521号で埼玉県県土整備部道路街路課長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長（当時）あて照会があった。

これを受けて文化財保護課では試掘による確認調査を実施し、飯塚古墳群の所在が確認されたため、平成15年2月10日付け教文第996号で道路街路課長あて、埋蔵文化財の所在及び法手続について回答するとともに、取り扱いについて次のとおり回答を行った。

### 1 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は、別図1～3を参照し、記録保存のための発掘調査を実施することと、当課職員の工事立会を受けること。

道路街路課と文化財保護課は、現状保存を含む埋

蔵文化財の保護措置について協議を行ったが、工事計画の変更が困難であったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託することになった。

発掘調査の実施については、道路街路課、文化財保護課及び財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議を行った。

文化財保護法第94条に基づく埼玉県知事からの発掘通知は平成15年6月19日付け道街第2036号で提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財の保護上必要な勧告は平成15年6月26日付け教文第3-206号で行った。

飯塚古墳群の発掘調査は、同古墳群の第3次調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、平成15年5月から7月まで実施された。

文化財保護法第92条に基づく財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財の保護上必要な指示は、平成15年6月26日付け教文第2-21号で通知した。

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

## 2. 発掘調査と報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

発掘調査は平成15年5月19日から平成15年7月31日まで実施した。調査面積は830㎡であった。

5月19日に現地で打ち合わせを行い、事務手続き等の準備を進める。26日現場事務所を設置し、28日に発掘機材の搬入を行い、併行して重機による表土掘削を開始する。

調査区は南から北に向かって、便宜的にA～E区に区分して実施した。遺構はA区のみから検出された。B区からE区は攪乱が激しく、遺構の検出は困難であった。

6月4日から補助員による遺構確認作業を開始する。続けて、遺構の精査、断面図及び平面図の作成、写真、遺物の取り上げ作業を順次進める。

7月14日に調査区全体の清掃を行い、15日に空中写真撮影を行う。

発掘調査は7月28日に終了し、28日から重機による埋め戻し作業を行う。発掘機材は29日に搬出し、31日に発掘事務所の撤去を行う。

発掘調査の終了後、発見届を熊谷警察署に、保管証を熊谷市教育委員会に提出した。

### (2) 整理・報告書の作成

飯塚古墳群の整理作業は、平成17年8月1日から平成17年9月30日まで実施した。

8月1日から遺物の水洗・注記を開始し、続けて遺物の接合・復元作業を実施した。遺構図面に関しては、図面整理を経て、第2原図を作成し、スキャナーで取り込んだ後にコンピューターによるトレース作業及び土層注記等を挿入し編集作業を進めた。遺物は復元が終了したものから実測作業に入り、8月下旬から併行してトレース・採拓をし、版下の作成を行った。

9月中旬に遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め編集作業を行った。

9月下旬に大部分の作業を完了させて、印刷業者を選定し、平成17年11月末に報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

#### (1) 発掘調査 (平成15年度)

理事長 桐川卓雄  
副理事長 飯塚誠一郎  
常務理事兼管理部長 中村英樹

#### 管理部

副部長 村田健二  
主席 田中由夫  
主任 江田和美  
主任 長滝美智子  
主任 福田昭美  
主任 腰塚雄二  
主任 菊池久

#### 調査部

調査部長 宮崎朝雄  
調査部副部長 坂野和信  
主席調査員(調査第二担当) 剣持和夫  
統括調査員 岩瀬譲  
調査員 永井いづみ

#### (2) 整理・報告書刊行 (平成17年度)

理事長 福田陽充  
副理事長 飯塚誠一郎  
常務理事兼管理部長 保永清光

#### 管理部

副部長 村田健二  
主席 高橋義和  
主席 宮井英一  
主任 福田昭美  
主任 菊池久  
主任 海老名健  
主任 岩上浩子

#### 調査部

調査部長 今泉泰之  
調査部副部長 坂野和信  
主席調査員(資料整理第二担当) 金子直行  
統括調査員 西井幸雄

## II 遺跡の立地と環境

埼玉県と群馬県の県境を流れる利根川の右岸は、利根川及び利根川の支流によって形成された自然堤防とその後背地からなる低地帯で、妻沼低地と呼称されている。熊谷市（旧妻沼町域）は、西から東に向かい高さを減じながら傾斜している。地形的には、福川と奈良川との間に形成された南側の微高地、芝川と福川の間の中部微高地、芝川と利根川の間形成された北側の台地に大別できる。

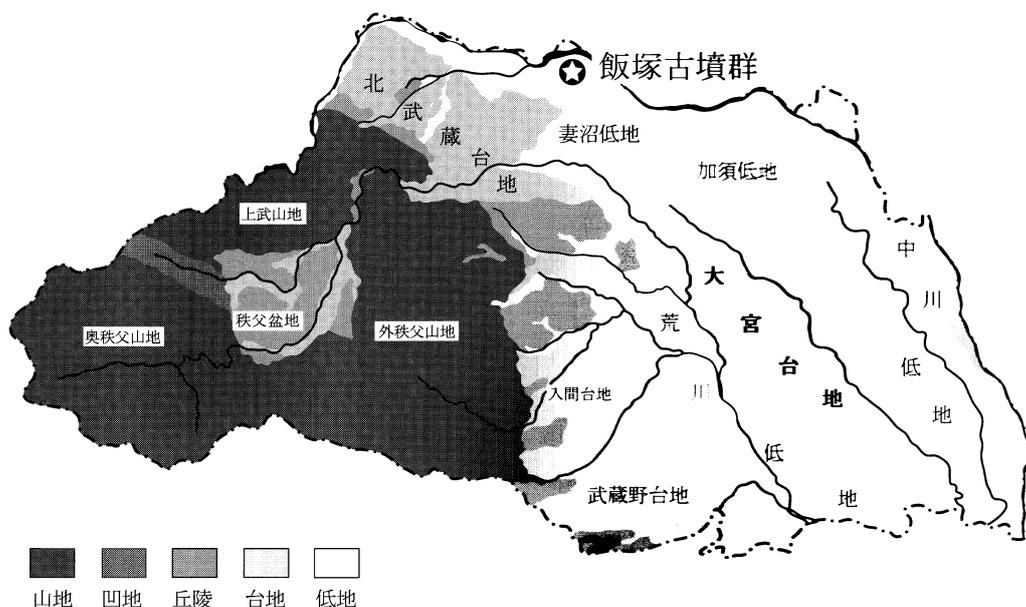
飯塚古墳群は、熊谷市大字飯塚に所在し、利根川の南方約2kmの微高地上に位置する。この微高地はかつての利根川の支流によって形成された自然堤防で、標高29.4～30.8mを測り、南から北東方向に緩やかに傾斜している。

本地域は、旧石器時代の遺跡は殆どみられない。また、縄文時代の遺跡は寺東遺跡から前期の関山式土器が検出されているが、遺跡数が増えるのは中期以降である。中期から後期の遺跡は、本郷前東遺跡・

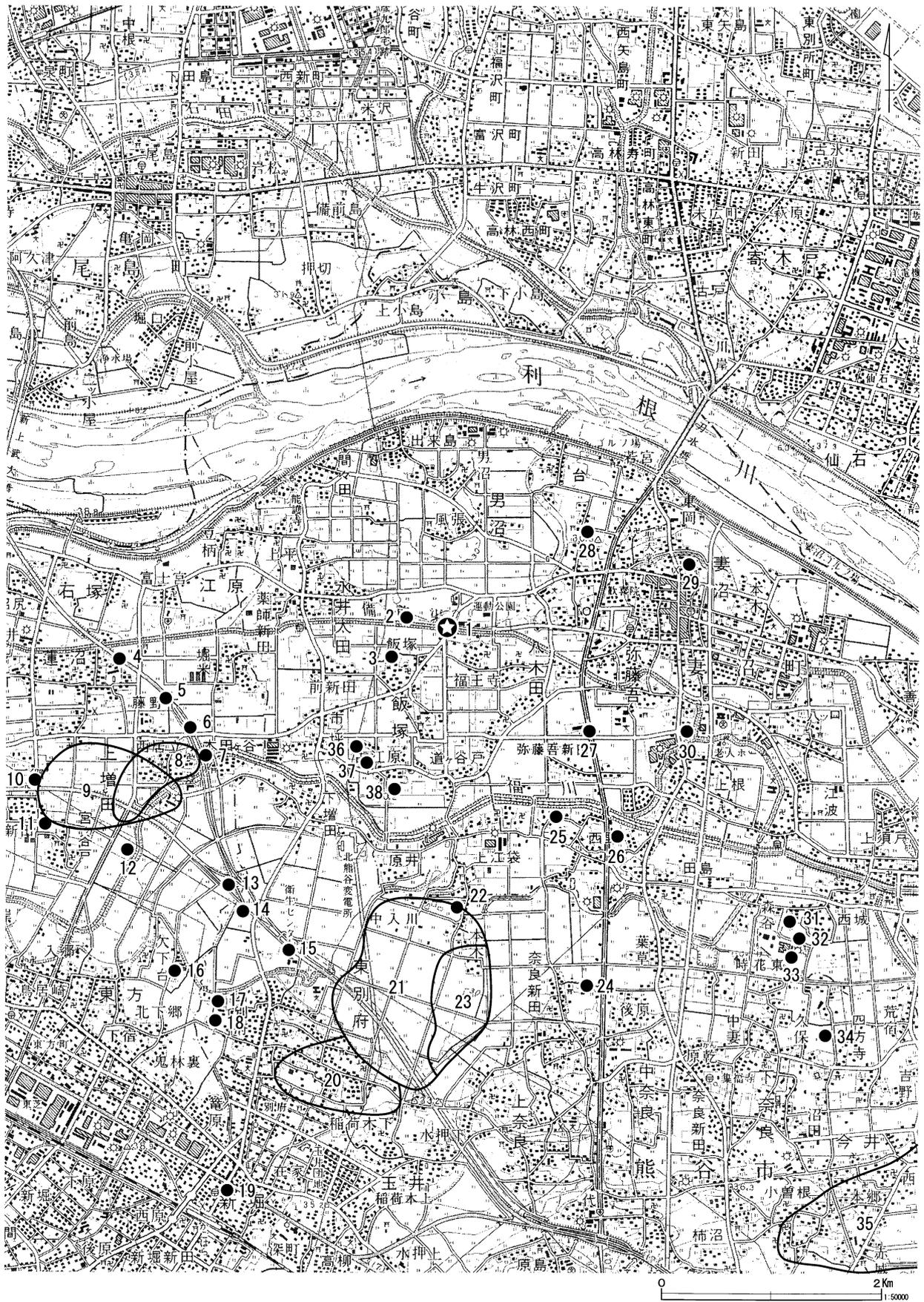
原遺跡・上敷免遺跡・前遺跡・諏訪木遺跡・寺東遺跡・石田遺跡等が挙げられる。後期から晩期になると、自然堤防上に生活の拠点を展開する。荒川扇状地上の諏訪木遺跡では住居跡と盛土状遺構が検出され、多量な土器と伴に耳飾、土偶、石剣など祭祀などに係る遺物が多く見つかった。

弥生時代は、中期から後期初頭の遺跡が密集する地域として注目されている。池上遺跡・小敷田遺跡・北島遺跡から集落跡が見つかり、飯塚北遺跡・横間栗遺跡・小敷田遺跡から中期の再埋葬・土壙が検出されている。

古墳時代になると自然堤防上の開発が進み、低地部に古墳及び集落が営まれるようになる。古墳時代前期の遺跡は、起会遺跡・森下遺跡・本郷前東遺跡・明戸東遺跡・宮ヶ谷戸遺跡・東川端遺跡・清水上遺跡・根絡遺跡・横間栗遺跡・東別府条里遺跡・弥藤吾新田遺跡・鶴森遺跡・上江袋遺跡・一本木前遺跡が挙



第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡

げられる。

集落が大規模に展開するのは原遺跡・東川端遺跡・新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡・砂田遺跡・居立遺跡・城北遺跡・柳町遺跡・妻沼小学校内遺跡・鶴森入胎遺跡・飯塚南遺跡・道ヶ谷戸遺跡・弥藤吾遺跡・北島遺跡・小敷田遺跡・一本木前遺跡などからで、古墳時代後期になると、妻沼低地では別府・奈良地域の拠点として250軒以上の住居跡が検出されていた一本木前遺跡をはじめとして、根絡遺跡・天神下遺跡・砂田遺跡・柳町遺跡・上敷免北遺跡・新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡・宮ヶ谷戸遺跡・原遺跡・城北遺跡・八日市場前遺跡・東川端遺跡・清水上遺跡・飯塚南遺跡・道ヶ谷戸遺跡と爆発的に拡大する。中条地域の拠点として北島遺跡は前期から規模を拡大し、周囲には諏訪木遺跡などがあり平安時代にかけ水辺祭祀が行われている。

古墳は、上敷免遺跡1号墳跡が最古段階で五領期後半から和泉期初頭に築造されている。この古墳は、長胴化した焼成前の底部穿孔壺（埴輪壺）をもつ墳丘約30mの円墳で、方形周溝墓と同一の墓域を形成している。また、近接する戸森松原遺跡では方形周溝墓と同じ墓域に10基の円墳が築造されており、周

溝墓群から初期群集墳への移行期の様相を示している。

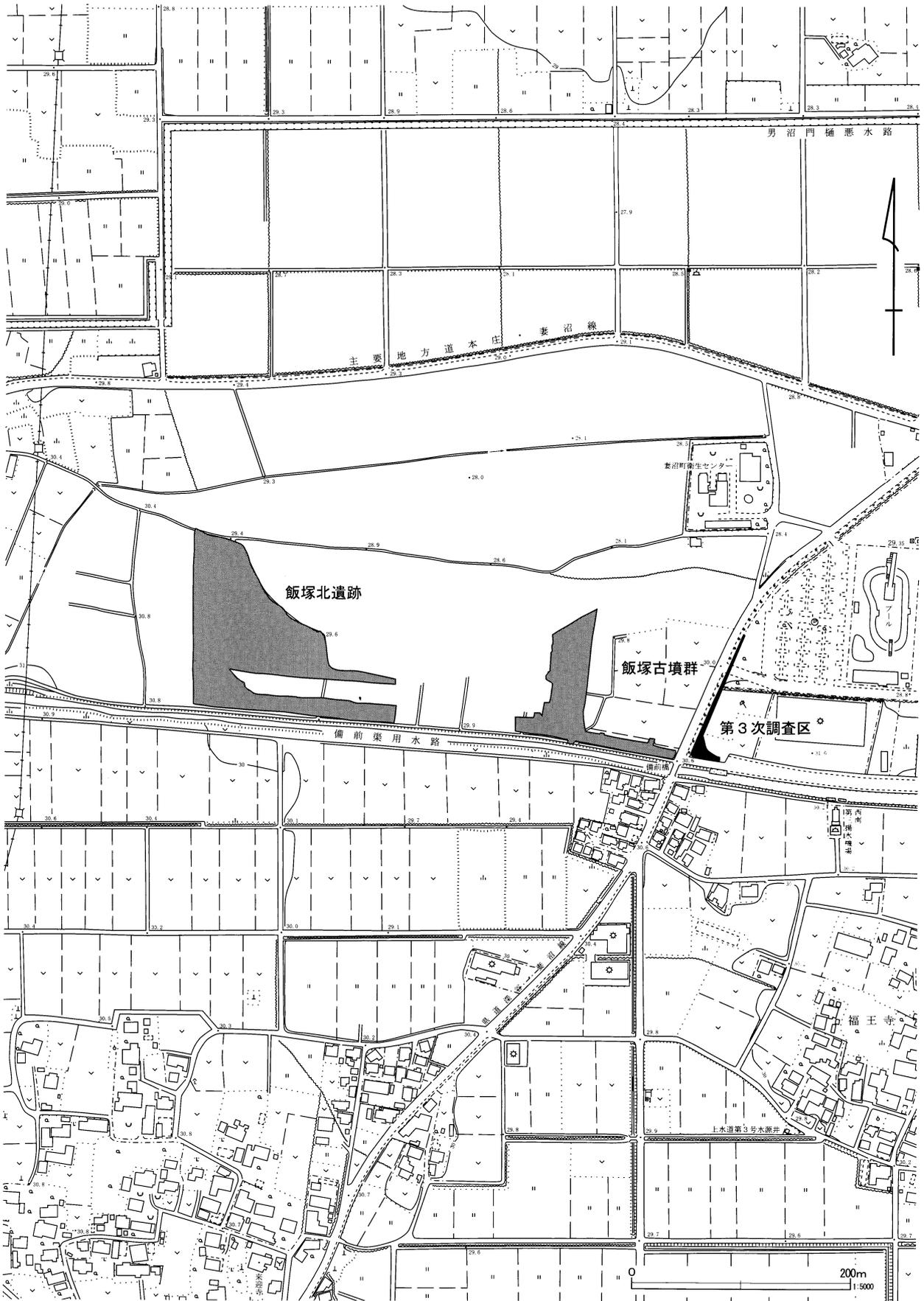
その後、5世紀後半には福川が利根川に流れこむ合流点付近に、とやま古墳（全長約69mの前方後円墳）が造営され、5世紀末葉には荒川扇状地との錯綜地帯に帆立貝式古墳の横塚古墳が相次いで築造され、稲荷山古墳の築造を契機とする埼玉古墳群の形成との密接な関連が伺える。

一方、5世紀末から6世紀初頭になると低地内部の各地に群集墳の造営が開始される。利根川右岸の自然堤防上に飯塚古墳群、摩多利神社古墳、王子古墳、妻沼低地西部の利根川と小山川に挟まれた自然堤防上に西浦古墳群、小山川と福川に挟まれた自然堤防上に上敷免古墳群、上増田古墳群、妻沼低地中央部を東流する福川流域に江袋古墳群、西城古墳群が築造される。さらに福川と星川に挟まれた自然堤防上に広がる中条古墳群、福川が利根川に流れこむ合流点付近の酒巻古墳群、斉条古墳群、大稲荷古墳群等の多くの群集墳が形成される。

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名
1	飯塚古墳群
2	飯塚北遺跡
3	飯塚遺跡
4	砂田遺跡
5	柳町遺跡
6	城北遺跡
7	居立遺跡
8	原遺跡
9	上増田古墳群
10	明戸東遺跡
11	宮ヶ谷戸遺跡
12	東川端遺跡
13	清水上遺跡
14	根絡遺跡
15	横間栗遺跡
16	幡羅遺跡
17	西別府祭祀遺跡
18	西別府廃寺
19	籠原裏遺跡

No.	遺跡名
20	別府古墳群
21	別府条里遺跡
22	前遺跡
23	一本木遺跡
24	横塚山古墳
25	上江袋遺跡
26	妻沼No.12古墳
27	弥藤吾新田遺跡
28	摩多利神社古墳
29	妻沼小学校内遺跡
30	王子古墳
31	西城古墳
32	妻沼No.19古墳
33	鶴森・入胎遺跡
34	長安寺北遺跡
35	中条古墳群
36	妻沼No.6古墳
37	飯塚南遺跡
38	道ヶ谷戸条里遺跡



第3図 遺跡周辺の地形図

### III 遺跡の概要

飯塚古墳群は、熊谷市大字飯塚247-1番地に所在する古墳時代後期の古墳群である。

当該地域は、埼玉県北部に広がる沖積平野で妻沼低地と呼称されている。遺跡は利根川とその支流によって形成された自然堤防上に多く立地している。

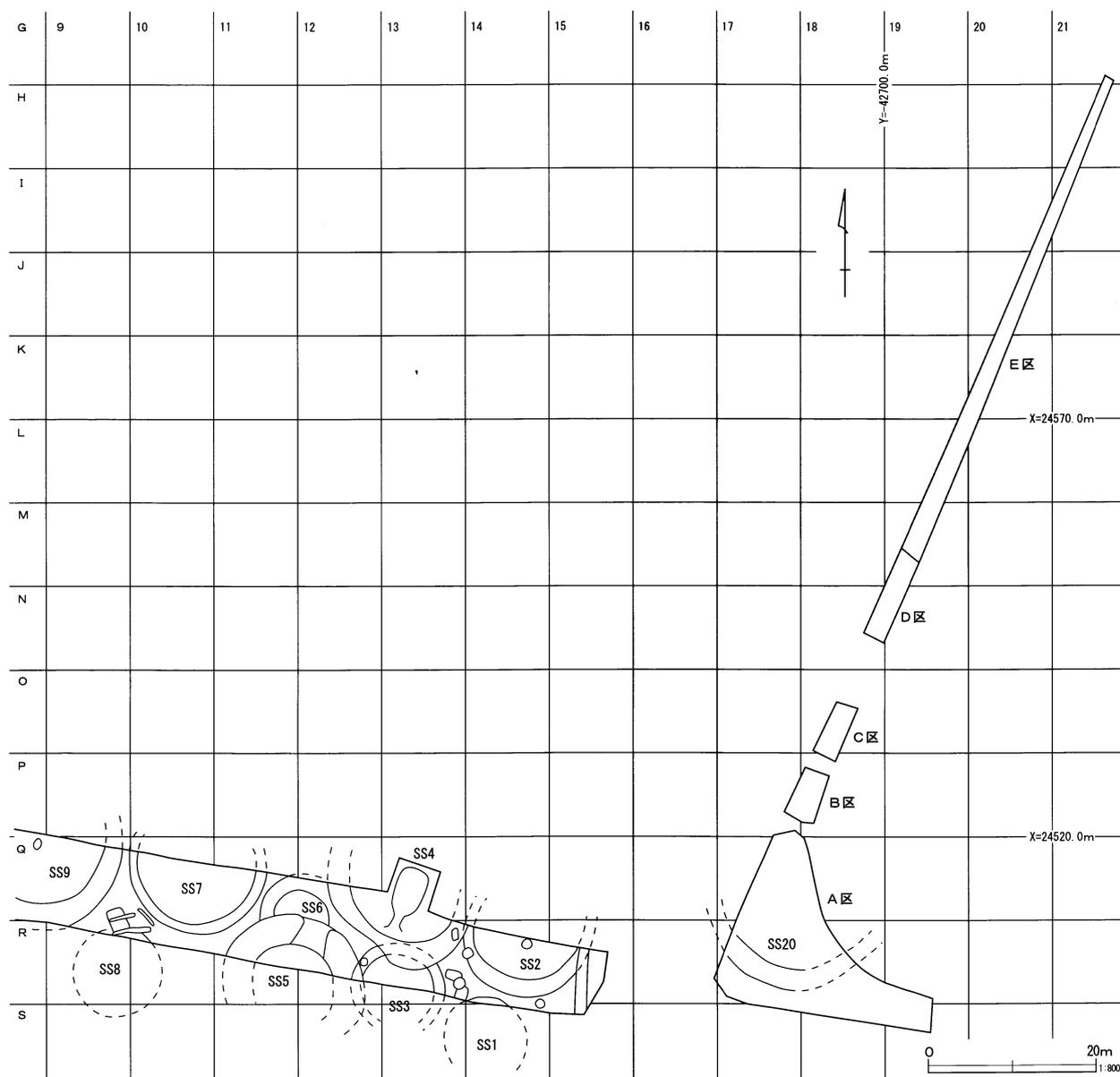
飯塚古墳群の発掘調査は、妻沼西部工業団地の造成工事に伴い、1997年4月～9月に第1次調査、1998年4月～9月に第2次調査、2003年11月～12月

に第4次調査が実施され、古墳20基が調査された。

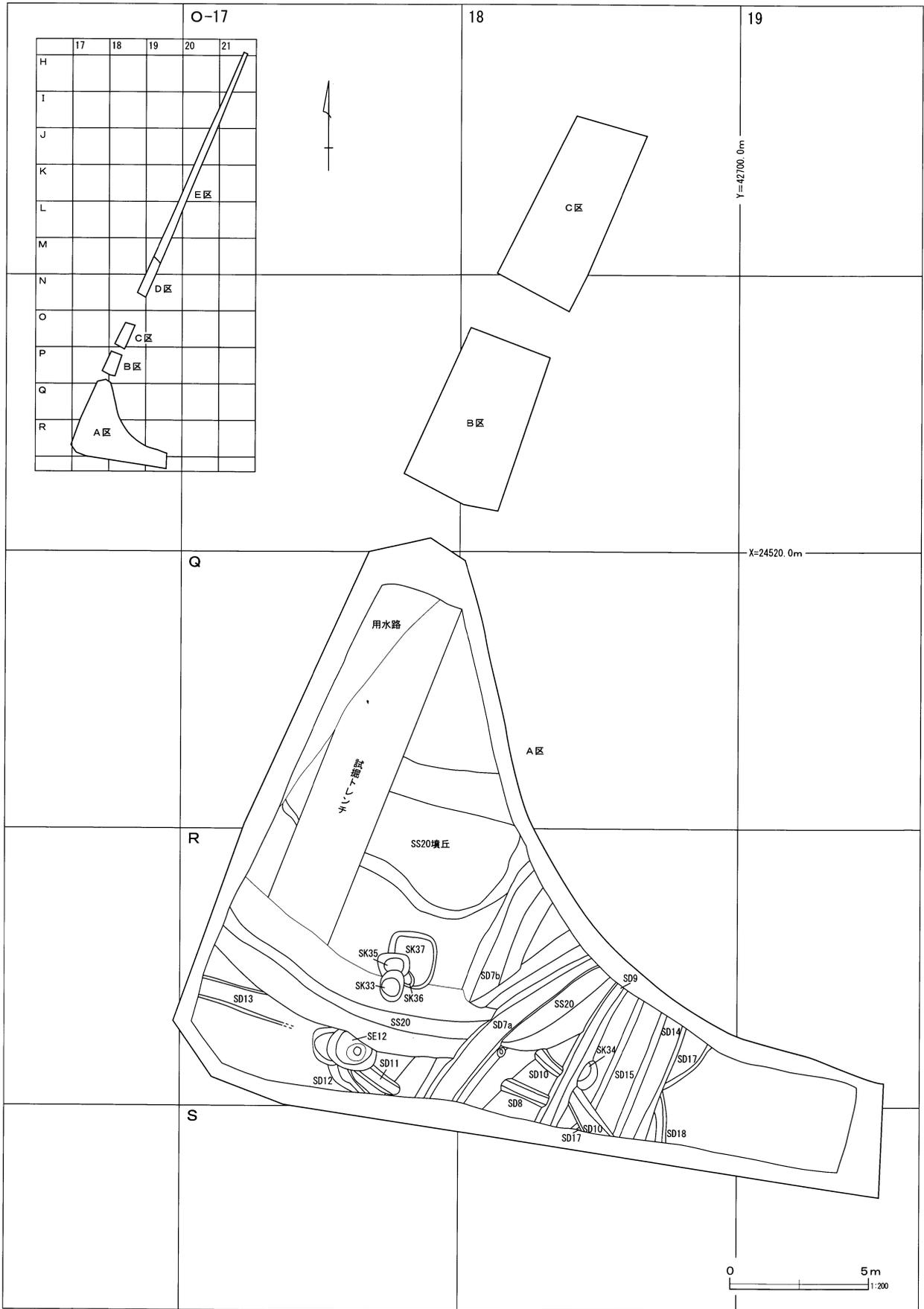
第3次調査は、県道深谷妻沼線の拡幅工事に伴って2003年6月～7月に発掘調査を実施した。

調査区は現道や建物への入り口を確保するため、A区からE区に分けて行った。調査の結果、A区以外は攪乱が激しく遺構・遺物は検出されなかった。

検出された遺構は、古墳1基と古代から中世の溝跡、土壇・井戸跡である。



第4図 飯塚古墳群第3次調査及び第1次調査区遺構概略図



第5図 飯塚古墳群第3次調査区遺構全体図

# IV 遺構と遺物

## 1. 古墳

### 第20号墳（第6～9図）

第20号墳は、調査区の南端（A区）のQ・R-17・18グリッドに位置する。調査された飯塚古墳群の中では東端に位置し、県道深谷妻沼線を挟んで第2号墳と近接している。調査区B～Eは攪乱が激しく、北側の周溝は確認できなかったため、正確な周溝径は明らかでないが、おおよそ20m前後になると思われる。

墳丘は試掘トレンチによって西側の一部を掘削した。断面の観察にはこのトレンチを利用して行った。

墳丘部の平面形は、周溝が弧状を呈していることから円墳になると思われるが、西側が用水によって、東側は第7号溝跡によって周溝が壊され、南・北側の墳丘は耕作等で削平されているため、墳丘部の残存状況は不良である。現在確認できる墳丘部は、約8×3mの不整形形状、高さは0.5m程度で、主体部等の関連施設は不明である。

遺物は溝の覆土中から出土している。土師器の坏（第9図1）は土層断面ラインの近く（第6図）底面から約80cmの覆土上層から出土した。ほぼ完形、内面に放射状に暗文が施されている。体部のヘラ削りは、中心から外周に向かって施され、中心で微調整が行われている。

埴輪は小破片である。接する第12号井戸跡から石室の石と思われる加工痕のある角閃石安山岩が出土しているが、周溝覆土からは殆ど石は検出されなかった。

## 2. 溝跡

溝跡は、R-18グリッドを中心に全体で11条検出された。溝の方向は南北方向のものが比較的大きく、東西方向の溝は幅狭である。溝の帰属時期は、覆土中から埴輪片しか出土しておらず、確定する要素は少ないが、多くは古代に帰属するものと思われる。

### 第7 a号溝跡（第10・11・15～18図）

R-17・18グリッドに位置する。第20号墳の周溝東側を壊して南東方向に延びている。幅約3m、深さ約1.25mと第20号墳周溝よりやや広い。横断面は逆台形状を呈している。覆土中ほどに厚く砂層が堆積しており、噴砂と思われる。

第20号墳の周溝を切っているため、覆土中から多数の埴輪片が出土している。埴輪以外の遺物がないため、溝跡の帰属時期を限定しづらいが、古代に属するものと思われる。

### 第7 b号溝跡（第10・11・15～18図）

R-18グリッドに位置する。幅約1.6m、深さ約0.8mで、横断面は逆蒲鉾状である。土層断面の観察から第7 a号溝跡より新しくなる。第7 a号溝跡と交差し南側に延びている。

第7 a・b号溝跡の中間に、墳丘の盛土の一部が残っており、墳丘が残存している時期に、それを壊して2本の溝が構築されたことが分かる。

第7号溝の覆土中から多くの角閃石安山岩、安山岩、砂岩、片岩の礫が出土しており、古墳の石室の石が流れ込んだものと考えられる。

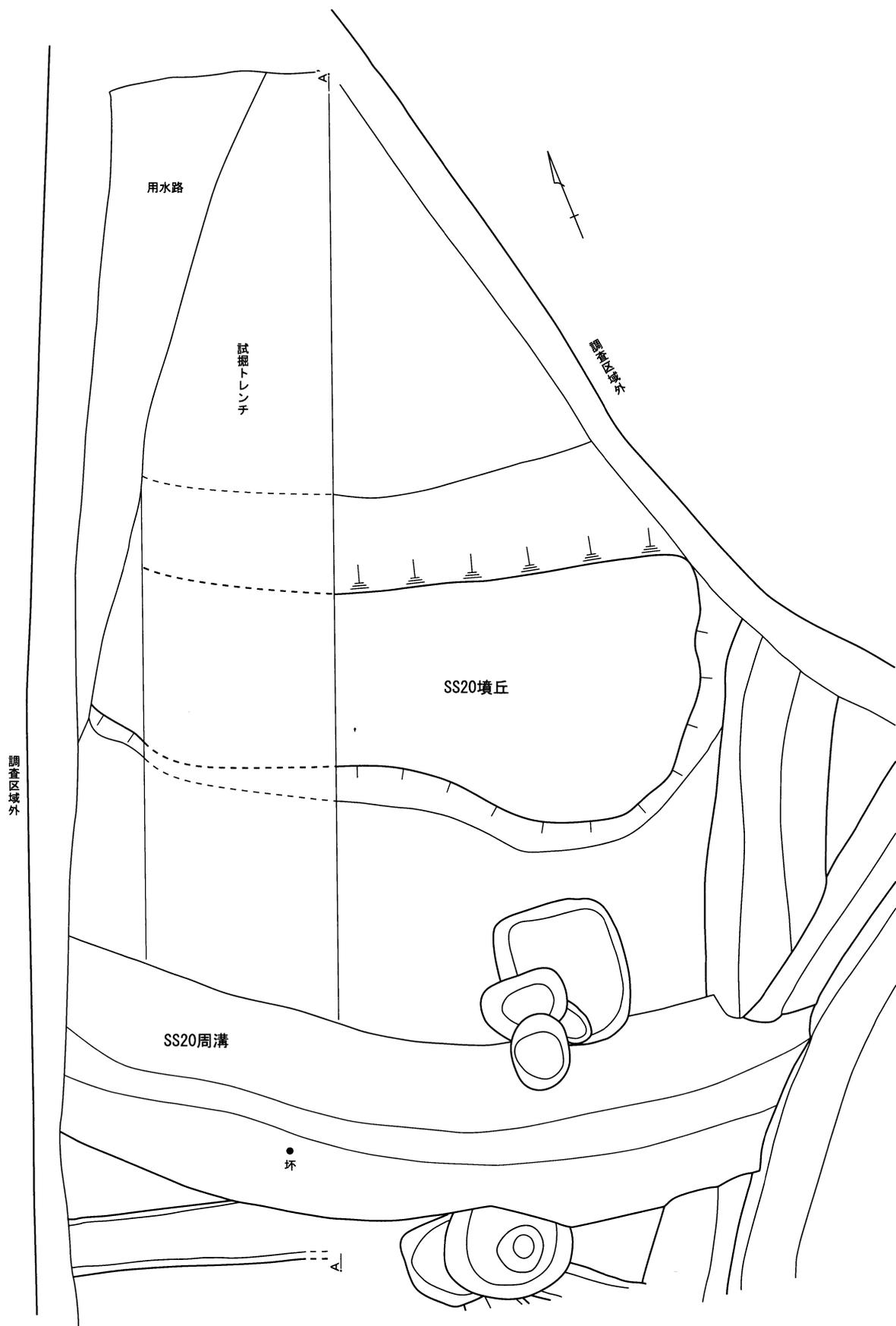
### 第8号溝跡（第12図）

R-18グリッドに位置する。幅約0.5m、深さ約0.13mである。第7 a号溝跡と第9号溝跡を東西に結んでいる。

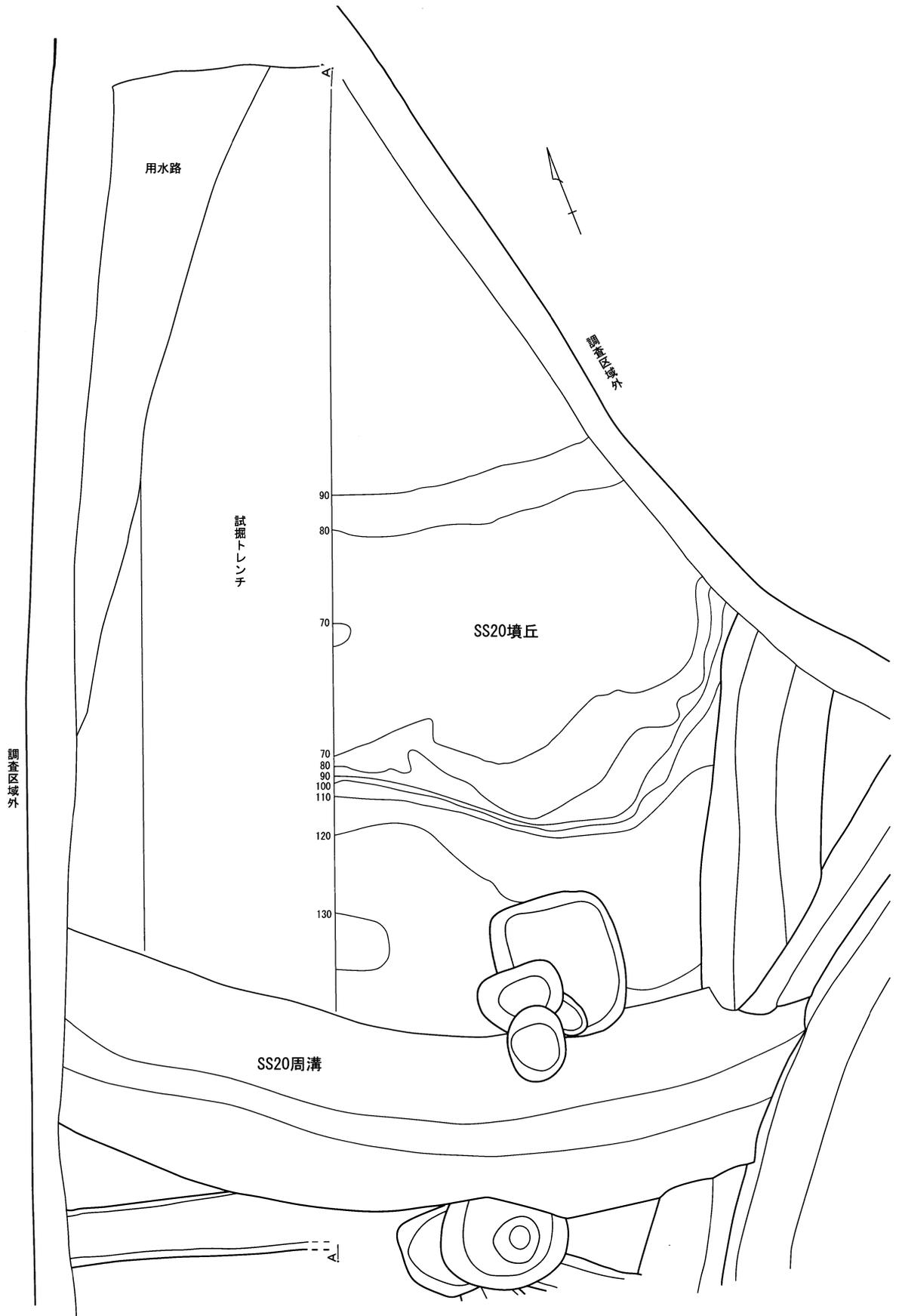
### 第9号溝跡（第12・18図）

R-18グリッドに位置する。第7 a号溝跡の東側にほぼ同じ方向に延びている。幅約0.7m、深さ約0.5mである。幅に対し深く、横断面は逆台形状を呈している。

覆土中から埴輪片が少量と礫が出土している。



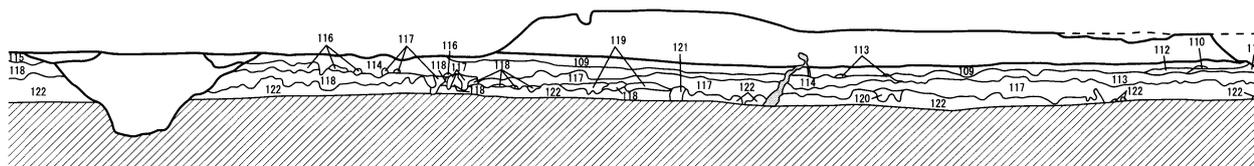
第6図 第20号墳平面图



第7図 第20号墳墳丘等高線図

A 30.2m

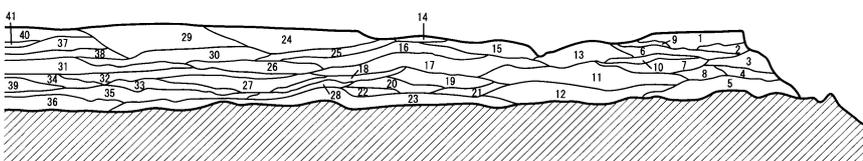
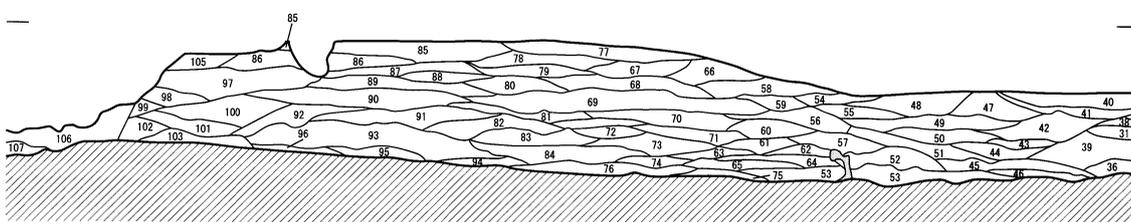
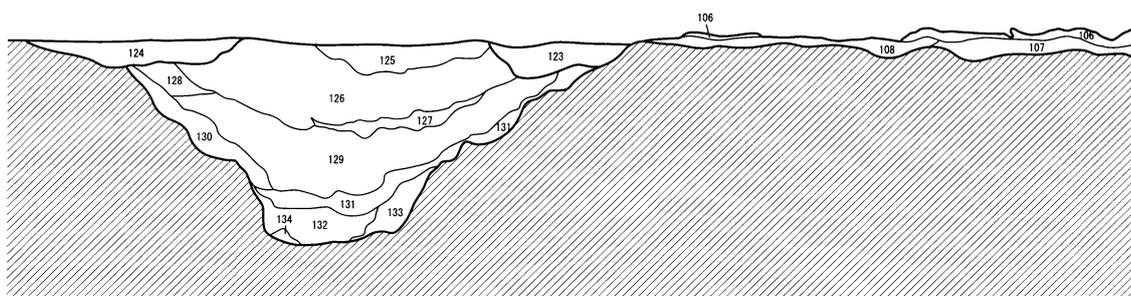
A'



- 109 10YR2/3黒褐色シルト粒土に10YR4/4褐色シルト粒土1%未満、酸化鉄粒子少量、白色粒子（火山灰）微量、炭ごく微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 110 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR3/3暗褐色シルト粒土2%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土15%、酸化鉄粒子微量、粘性あり、強くしまる。
- 111 10YR3/3暗褐色シルト粒土に10YR4/4褐色シルト粒土30%、10YR3/3暗褐色シルト粒土1%未満、酸化鉄粒子2%、炭ごく微量含む。粘性あり、非常に強くしまる。
- 112 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR3/3暗褐色シルト粒土3%、酸化鉄粒子少量、白色粒子（火山灰）・炭微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 113 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土15%、10YR2/3黒褐色シルト粒土1%未満、白色粒子（火山灰）微量、赤色粒子・炭（5×5mm～1cm×1cm大）1%含む。粘性あり、非常に強くしまる。
- 114 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR3/3暗褐色シルト粒土1%未満、10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土ごく微量含む。酸化鉄粒子・白色粒子（火山灰）微量、赤色粒子・炭ごく微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 115 10YR4/4褐色シルト粒土に10YR4/6褐色シルト粒土15%、酸化鉄粒子5%、粘性あり、強くしまる。

- 116 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR4/4褐色シルト粒土2%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土5%、酸化鉄粒子少量含む。粘性あり、強くしまる。
- 117 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土20%含む。炭ごく微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 118 10YR4/4褐色シルト粒土に10YR3/4暗褐色シルト粒土2%、10YR4/6褐色シルト粒土3%、10YR5/3にぶい黄褐色シルト粒土10%、酸化鉄粒子少量、粘性あり、強くしまる。
- 119 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR5/3にぶい黄褐色シルト粒土2%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土7%、酸化鉄粒子ごく微量、粘性強、しまる。
- 120 10YR4/4褐色シルト粒土に、10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土3%、10YR4/6褐色シルト粒土3%、粘性あり、強くしまる。
- 121 10YR3/4暗褐色シルト粒土に10YR4/6褐色シルト粒土7%、10YR5/3にぶい黄褐色シルト粒土1%、炭ごく微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 122 10YR4/4褐色シルト粒土に10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土5%、10YR3/4暗褐色シルト粒土1%、炭ごく微量含む。粘性強、強くしまる。

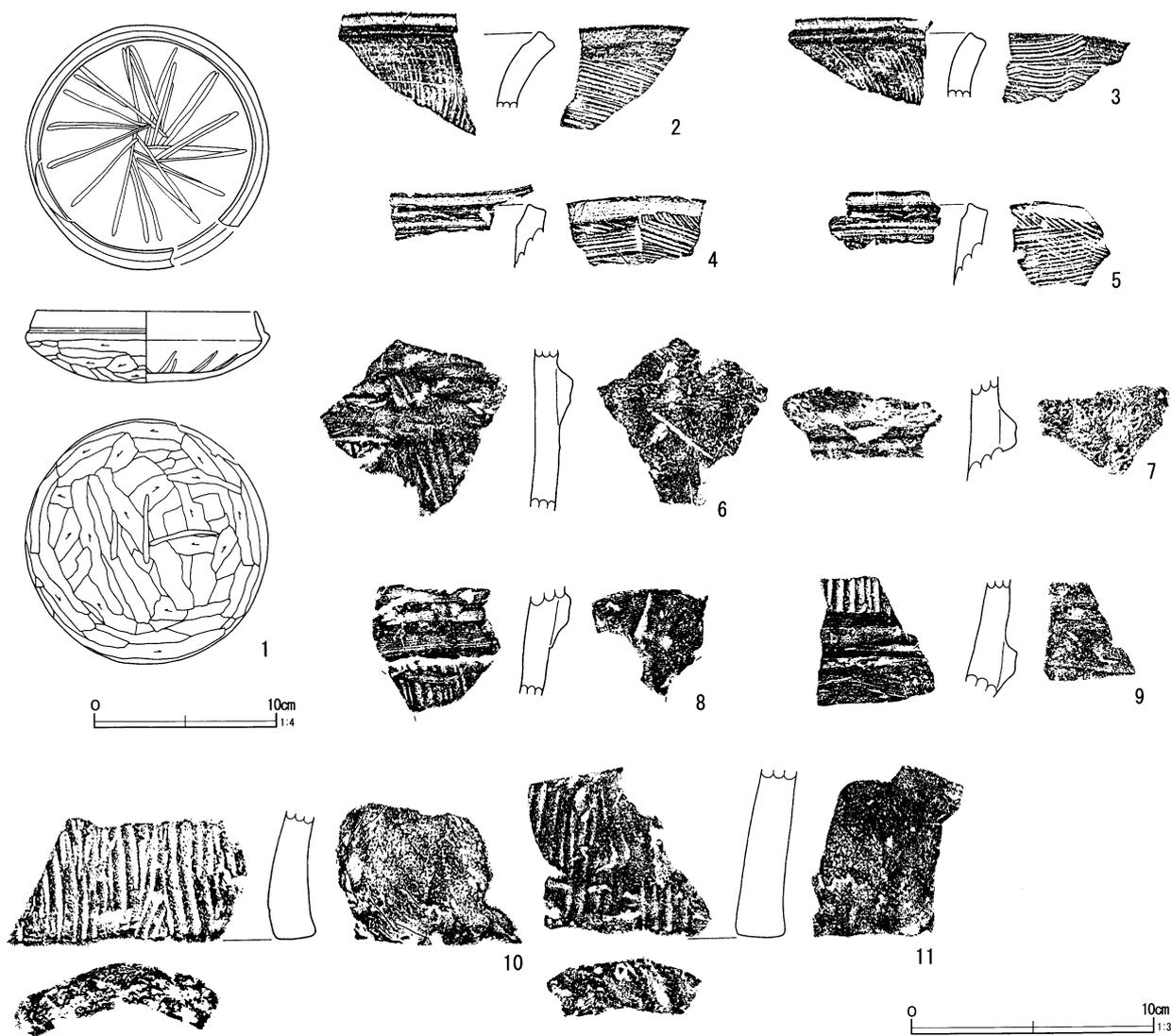
A 30.0m



第 8 図 第20号墳断面図







第9図 第20号墳出土遺物

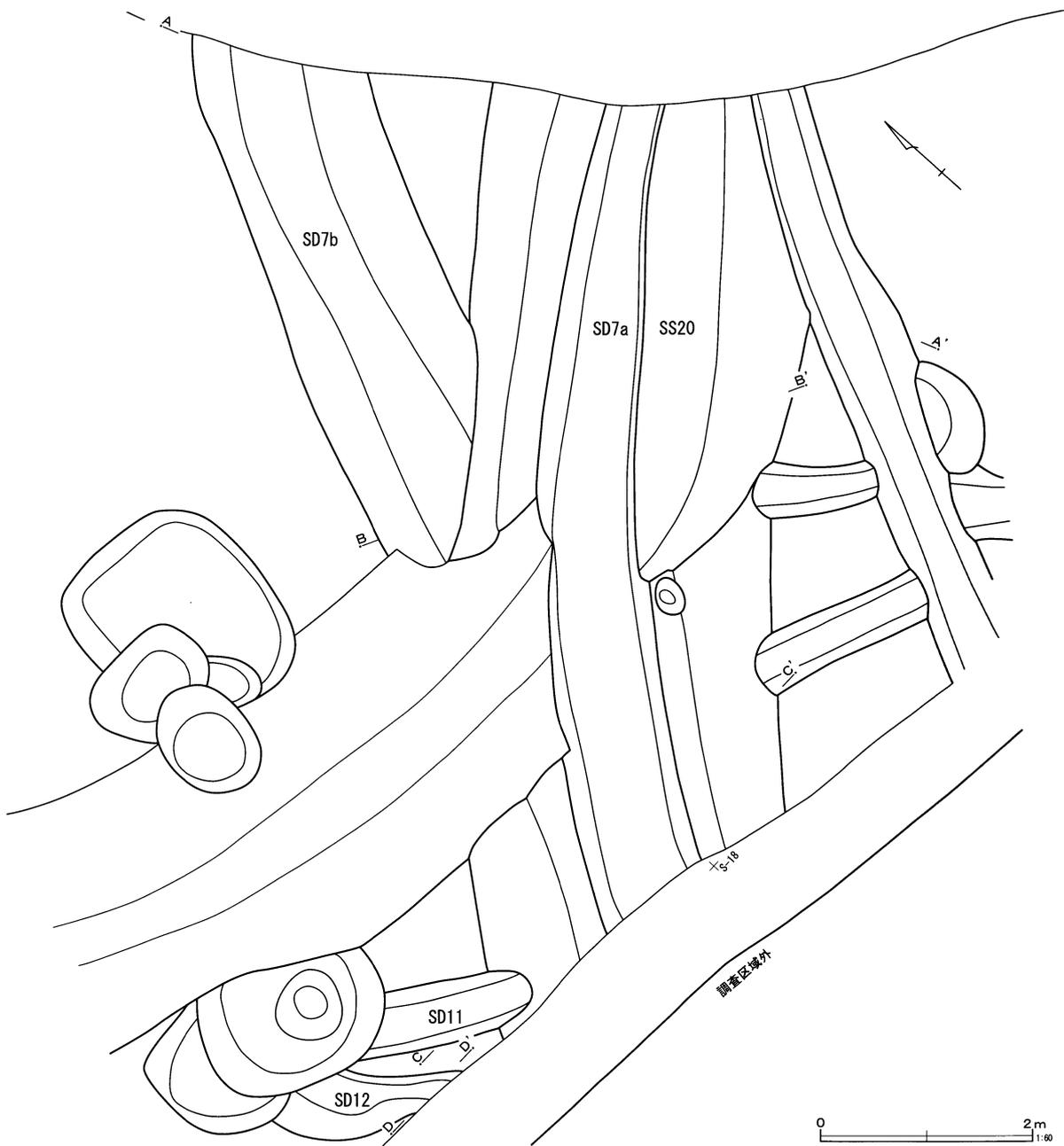
第2表 第20号墳出土遺物観察表 (第9図)

番号	器種	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	形態・成形・調整技法の特徴	備考
1	土師器 器坏	口径 12.0 器高 4.0 最大径 13.4	①角閃石粒子・砂粒を少量含む②良好③淡灰褐色、底部外面黒斑④ほぼ完形	周溝覆土 上層	須恵器坏身模倣形態。口縁部内外面に横ナデを施し、口縁部と体部の境に棒状工具による沈線を巡らす。体部外面はヘラ削りを施し、内面は横ナデの後ややまばらな放射状のヘラミガキを施す。	口縁部内外面に黒彩を一部残す。

第3表 第20号墳出土円筒埴輪観察表 (第9図)

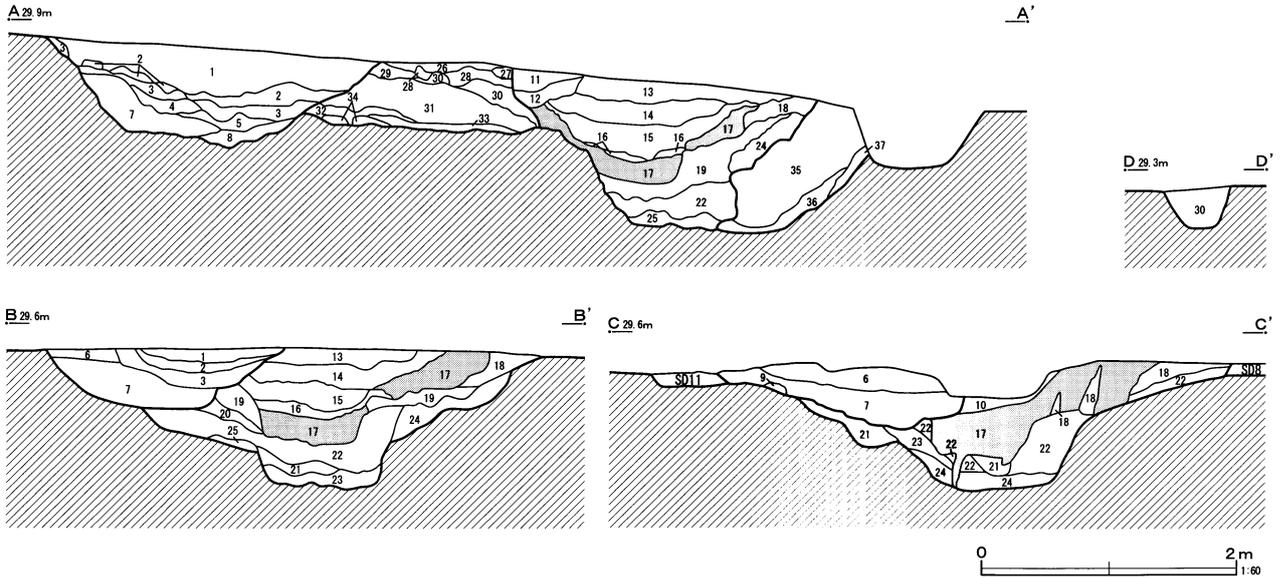
番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
2	円筒	口縁部	周溝 R-17G	①B②橙 7.5YR7/6 ③良好・硬質	12	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	内面色調 明褐灰 7.5YR7/2
3	円筒	口縁部	周溝 R-17G	①B②橙 7.5YR7/6 ③良好・硬質	14	外面はタテハケ調整で、内面はヨコハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
4	円筒	口縁部	周溝 R-17G	①C②にぶい橙 7.5YR6/4 ③良好・硬質	14	外面はヨコナデ調整で、内面はナナメハケ調整の後にヨコハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
5	円筒	口縁部	周溝 R-17G	①C②橙 5YR6/6 ③良好・硬質	12	外面はヨコナデ調整で、内面はナメハケ調整の後にヨコハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
6	円筒	体部	周辺	①C②にぶい橙 7.5YR6/4 ③普通・軟質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は上稜よりも下稜が低い台形で、突出の高さは約7mmである。	
7	円筒	体部	周辺	①B②にぶい橙 7.5YR6/4 ③不良・軟質		外面はヨコナデ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約7mmである。	内面に黒色物質付着。
8	円筒	体部	周辺	①B②にぶい黄 橙10YR6/3 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約6mmである。	内面色調 橙5YR6/6



第10図 第7号溝跡平面図

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
9	円筒	体部	周辺	①C②赤褐 5YR4/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約6mmである。	
10	円筒	底部	周溝 R-18G	①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	4	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。底面は砂粒状の圧痕がある。	
11	円筒	底部	周辺	①B②にぶい橙 7.5YR6/4 ③普通・軟質	5	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。底面は棒状の圧痕がある。	



SD7b

- 1 10YR4/4 褐色シルト土に白色粒子少量、赤色粒子・土器細片を少量含む。非常に強くしまる。
- 2 10YR4/4 褐色シルト土ににぶい黄褐色シルト土7%、酸化鉄粒2%、白色粒子微量、粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 3 10YR4/4 褐色シルト土に灰黄褐色シルト土15%含む。酸化鉄粒10%、白色粒子少量。粘性わずかにあり、非常に強くしまる。
- 4 10YR3/4 暗褐色シルト土ににぶい黄褐色シルト土30%、酸化鉄粒25%、白色粒子少量含む。しまる。
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト粒土に暗褐色シルト粒土20%、灰黄褐色シルト土1%、酸化鉄粒15%、白色粒子少量含む。粘あり、非常に強くしまる。
- 6 10YR3/4 暗褐色シルト土ににぶい黄褐色シルト土25%、酸化鉄粒25%、白色粒子少量と小礫を極微量含む。粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 7 10YR4/2 細粒砂に酸化鉄粒20%、白色粒子少量、小礫を極微量含む。粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト土ににぶい黄褐色シルト粒土10%、暗褐色シルト粒土7%、酸化鉄粒15%、白色粒子少量含む。粘性あり、非常に強くしまる。
- 9 10YR3/4 暗褐色シルト土に褐色シルト土5%、酸化鉄粒少量、白色粒子微量、粘性あり、強くしまる。

SD7a

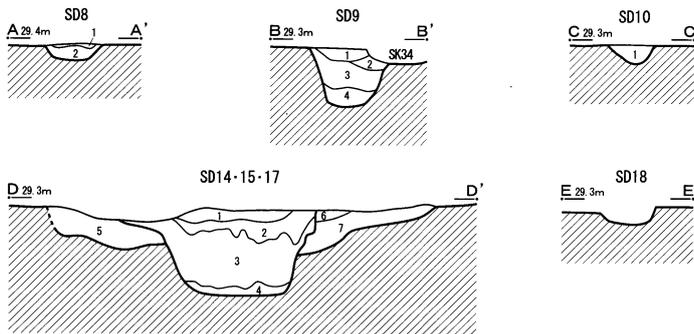
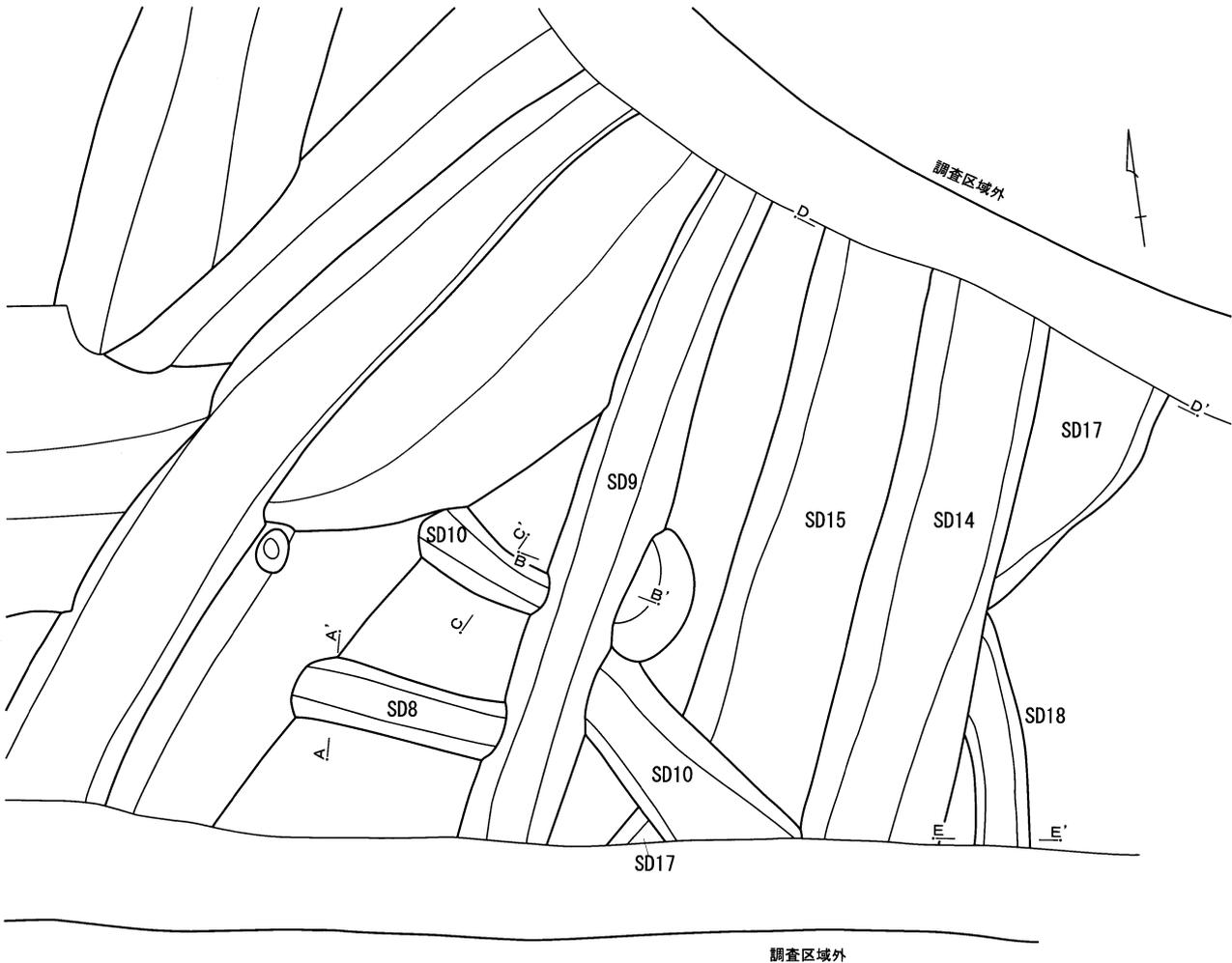
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト土に褐色シルト土7%、酸化鉄粒5%、白色粒子微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 11 10YR3/4 暗褐色シルト土ににぶい黄褐色シルト土10%、にぶい黄褐色シルト土1%、暗褐色シルト粒土15%、酸化鉄粒7%、白色粒子中量。粘わずかにあり、非常に強くしまる。
- 12 10YR3/3 暗褐色シルト粒土に暗褐色シルト粒土30%、灰黄褐色シルト粒土10%、褐色シルト粒土1%、酸化鉄粒少量、白色粒子中量含む。粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 13 10YR4/4 褐色細粒砂7%、にぶい黄褐色細粒砂に酸化鉄粒7%、白色粒子、極微量含む。しまり強。
- 14 10YR4/4 褐色細粒砂ににぶい黄褐色細粒砂25%含む。酸化鉄粒30%、白色粒子極微量含む。しまる。
- 15 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂に褐色細粒砂10%、にぶい黄褐色粘土7%含む。酸化鉄粒25%、非常に強くしまる。
- 16 酸化鉄粒砂ににぶい黄褐色細粒砂7%、白色粒子極微量含む。強くしまる。
- 17 (填砂) 暗褐色粗粒砂に黒褐色粗粒砂3%、褐色粘土1%、10YR3/4暗褐色粘土1%含む。酸化鉄粒7%、白色粒子微量含む。非常に強くしまる。
- 18 10YR3/4 暗褐色シルト土に暗灰黄シルト土25%、酸化鉄粒10%、白色粒子少量、粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 19 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土ににぶい黄褐色粘土5%、にぶい黄褐色細粒砂3%、酸化鉄粒子3%、白色粒子極微量。粘性強、しまり強。

- 20 10YR4/2 灰黄褐色シルト粒土ににぶい黄褐色シルト土1%、酸化鉄粒40%、白粒少量含む。粘性あり、しまる。
- 21 10YR3/4 暗褐色粘土に褐色シルト粒土2%、酸化鉄粒25%含む。粘性強、強くしまる。
- 22 10YR3/4 暗褐色粘土ににぶい黄褐色粘土20%、褐色細粒砂1%、酸化鉄粒15%。粘性強、強くしまる。
- 23 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に褐色シルト粒土10%、細粒子10%、酸化鉄粒5%。粘性あり、強くしまる。
- 24 10YR3/4 シルト粒土にシルト粒土20%、褐色シルト粒土1%、酸化鉄粒10%、炭化物を微量含む。粘性強、強くしまる。
- 25 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト粒土に黒褐色シルト粒土15%、褐色シルト粒土1%含む。酸化鉄粒2%、粘性あり。非常に強くしまる。

SS20

- 26 10YR3/4 暗褐色シルト粒土ににぶい黄褐色シルト粒土15%、酸化鉄粒子2%、白色粒子少量。粘わずかにあり、非常に強くしまる。
- 27 10YR4/4 暗褐色シルト粒土に暗褐色シルト粒土5%、黒褐色シルト粒土5%、酸化鉄粒2%、白色粒子微量。粘性あり、しまりあり。
- 28 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト土に暗褐色シルト土3%、酸化鉄粒子5%、白色粒子少量含む。粘わずかにあり、非常に強くしまる。
- 29 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に褐色シルト粒土1%、にぶい黄褐色シルト粒土7%、酸化鉄粒5%、白色粒子少量含む。粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 30 10YR4/4 褐色シルト粒土に灰黄褐色シルト粒土10%含む。酸化鉄粒30%、白色粒子極微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 31 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に褐色シルト粒土25%、にぶい黄褐色シルト粒土5%、酸化鉄粒15%、白色粒子微量含む。粘性ややあり、強くしまる。
- 32 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に褐色シルト粒土1%、にぶい黄褐色シルト粒土30%、酸化鉄粒15%、白色粒子微量、黒褐色シルト粒土1%未満、褐色シルト粒土1%。粘性ややあり、非常に強くしまる。
- 33 10YR4/4 褐色シルト土に灰黄褐色シルト土15%、褐色シルト土10%、酸化鉄粒15%、白色粒子極微量含む。粘性あり、強くしまる。
- 34 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト土に灰黄褐色シルト粒土10%、黒褐色シルト土10%、褐色シルト土7%、酸化鉄粒10%。粘性あり、しまる。
- 35 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に10YR4/6褐色シルト粒土1%、10YR3/4暗褐色シルト粒土10%、酸化鉄粒子5%。粘性強、しまる。
- 36 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に10YR4/6褐色シルト粒土15%、10YR3/4暗褐色シルト粒土5%含む。酸化鉄粒子2%含む。粘性強、しまる。
- 37 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒土7%、10YR3/3暗褐色シルト粒土2%、10YR4/6褐色シルト粒土25%、酸化鉄粒子微量、炭ごく微量、粘性強、強くしまる。

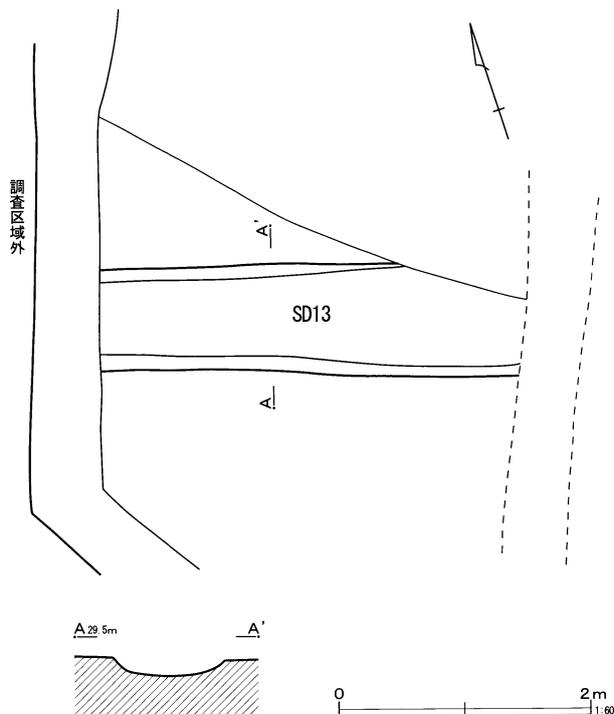
第11図 第7号溝跡断面図



- SD8**
- 1 灰褐色 7.5YR4/2 酸化鉄粒φ1~2mm含む。しまり、粘性あり。
  - 2 褐灰色 7.5YR4/1 酸化鉄φ2~3mm含む。しまり弱、粘性強い。
- SD9**
- 1 にぶい黄褐色 10YR5/3 白色粒子多、酸化鉄粒φ1~2mm含む。砂粒含む、しまり強、粘性弱。
  - 2 灰黄褐色 10YR4/2 白色粒子少量、酸化鉄ブロック含む。灰色粘土少量、しまりややあり、粘性あり。
  - 3 灰褐色 10YR4/1 灰色粘土主体、酸化鉄粒φ1~2mm多量。砂粒少量。しまりややあり、粘性強。
  - 4 灰褐色 10YR4/1 黄褐色土粒φ2~3mm多量、酸化鉄粒φ2~3mm含む。しまりややあり、粘性強。
- SD10**
- 1 灰黄色 2.5Y7/2 砂粒主体、酸化鉄がまだらに混入。しまりあり、粘性なし。

- SD14・15・17**
- 1 10YR4/6 細粒砂にシルト粘土10%、酸化鉄粒5%、白色粒少量。しまり強。
  - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト粒土ににぶい黄褐シルト土40%、酸化鉄粒7%、白色粒子微量含む。粘性あり、強くしまる。
  - 3 10YR3/4 暗褐色シルト粒土ににぶい黄褐色細粒砂25%、酸化鉄粒砂50%、白色粒子少量。非常に強くしまる。
  - 4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト粘土ににぶい黄褐シルト粘土15%、酸化鉄粒10%。粘性強、強くしまる。
  - 5 10YR3/4 暗褐色シルト土ににぶい黄褐シルト土40%、酸化鉄粒25%、にぶい黄橙シルト粒土1%、白色粒子微量含む。粘性あり、非常に強くしまる。
  - 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト粒土に酸化鉄粒2%含む、粘性強。
  - 7 10YR3/4 暗褐色シルト粒土に灰黄褐シルト粒土15%含む、酸化鉄粒20%。粘性強、強くしまる。

第12図 第8~10・14・15・17・18号溝跡平面・断面図



第13図 第13号溝跡平面・断面図

#### 第10号溝跡 (第12図)

R・S-18グリッドに位置する。幅は約1～0.5mと一定しておらず、深さ約0.15mと浅い。第9・15号溝跡をまたいで北西は第7a号溝跡から南東は調査区外に伸びている。

#### 第11号溝跡 (第10図)

R-17グリッドに位置する。約0.6m、深さは約0.1mと浅い。第12号井戸跡と第7a号溝跡をつないでいる。

#### 第12号溝跡 (第10図)

R-17グリッドに位置する。幅約0.3～0.6m、深さ約0.3mで横断面は逆台形状である。第11号溝と同じく第12号井戸跡と第7a号溝跡をつないでいる。

#### 第13号溝跡 (第13図)

R-17グリッドに位置する。東西方向に伸びているが、西側は調査区外、東側は古墳の周溝等と重なるため規模は不明である。幅約0.75m、深さ約0.1mと

浅い。

#### 第14号溝跡 (第12図)

R-18グリッドに位置する。南北方向に調査区を横断している。幅約1m、深さ約0.6mで、横断面は箱型を呈している。

溝覆土中から第22図66の加工痕のある角閃石安山岩が出土した。重さは5.82kgで両面に鑿状工具によって平坦面を作り出している。

#### 第15号溝跡 (第12・18図)

R-18グリッドに位置する。第14号溝跡と並走しており、東側の立ち上がりは不明である。深さは約0.2～0.25mと浅く、横断面は箱型になると思われる。

溝覆土から埴輪片が出土している。

#### 第17号溝跡 (第12・22図)

R-18グリッドに位置する。第14号溝跡と斜めに交差し、第15号溝跡の南西に伸びている。規模等の詳細は不明である。深さは約0.1mと浅い。

#### 第18号溝跡 (第12図)

S-18グリッドに位置する。第14号溝跡と南側で交差している。幅約0.4m、深さ約0.1～0.2mと浅い。

### 3. 土壌・井戸跡

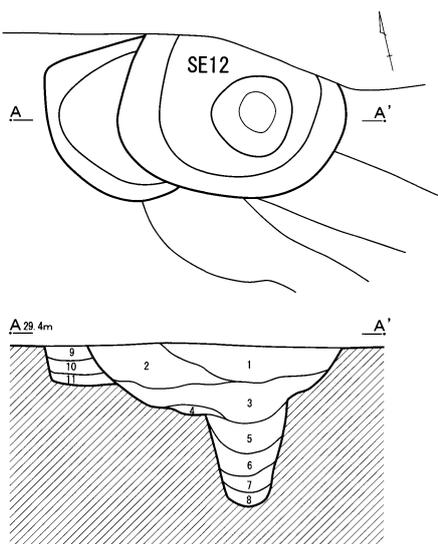
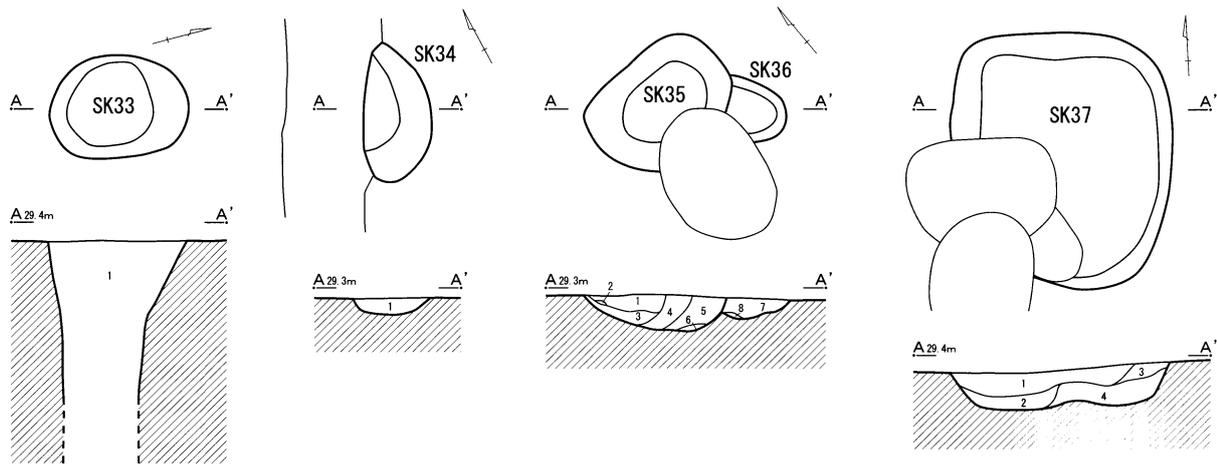
土壌及び井戸跡は調査区の南端の中央にまとまっている。今回の調査で検出された土壌は4基、井戸跡は2基である。

#### 第34号土壌 (第14図)

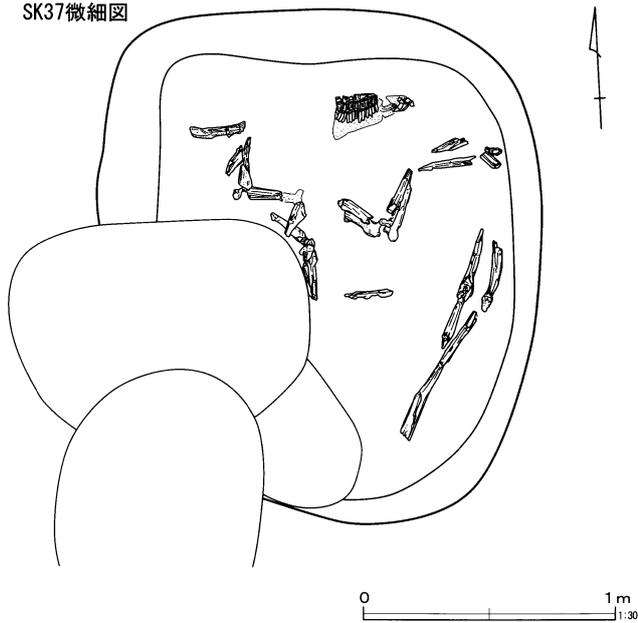
R-18グリッドに位置する。西側は第9号溝跡と重複するが、断面の観察から溝跡より新しいことが分かった。平面の形状はやや不整の円形で径は0.5～0.6mで、深さは約0.1mである。

#### 第35・36号土壌 (第14・18図)

R-17グリッドに位置する。第35・36号土壌、第33



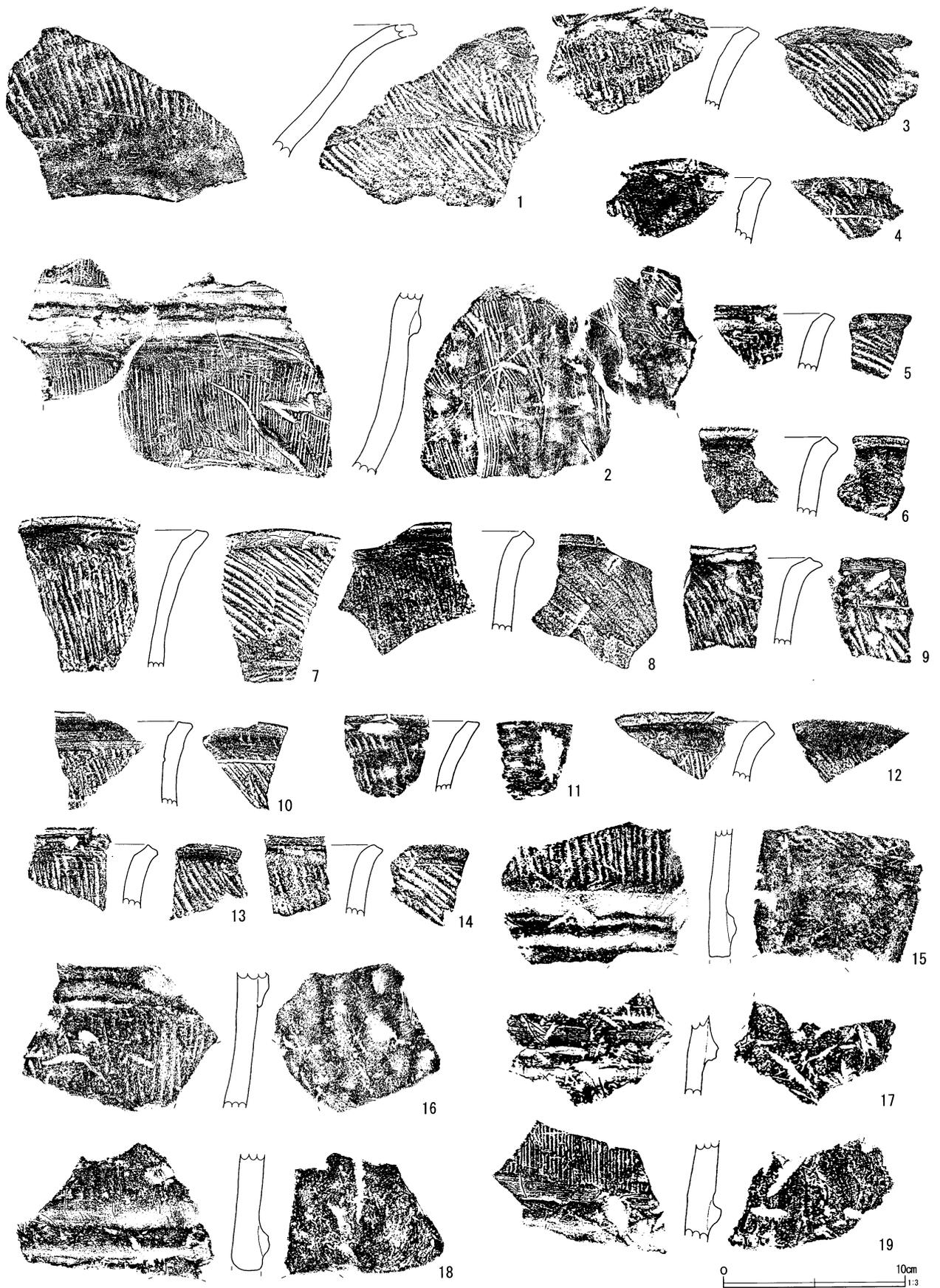
SK37微細図



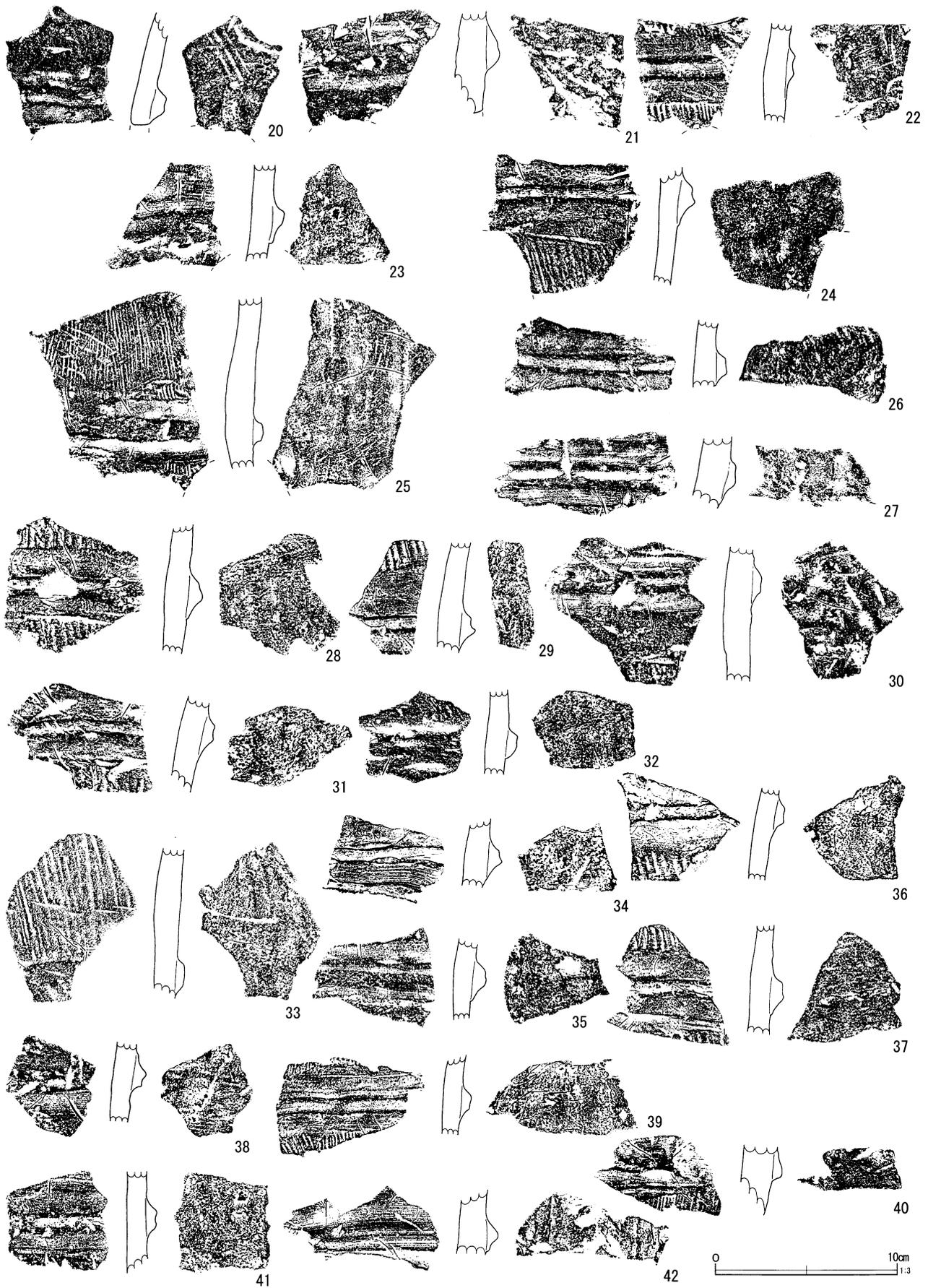
- SK33**
- 1 明黄褐色 10YR6/6 灰黄褐色土がしまりに混入する。酸化鉄粒子含む。砂粒多量、(埋め戻し)、しまりあり、粘性ややあり。
- SK34**
- 1 灰黄褐色 10YR5/2 白色粒子多量、酸化鉄粒φ1~2mm含む。砂粒含む、しまり強、粘性弱。
- SK35・36**
- 1 灰色 5Y5/1 白色粒子多量、酸化鉄粒φ3~5mm含む、しまり強、粘性弱。  
地山ブロック、しまり強、粘性あり。
- 2 明黄褐色 2.5Y7/6 白色粒子少量、酸化鉄粒子含む、しまりあり、粘性あり。
- 3 黒褐色 7.5YR3/2 白色粒子少量、酸化鉄粒子含む、しまりあり、粘性あり。
- 4 褐灰色 5YR4/1 白色粒子少量、炭化物ブロック(φ5mm)微量、黄褐色土粒φ1~2mm少量、酸化鉄粒φ3~5mm多量、しまり強、粘性ややあり。
- 5 灰褐色 5YR4/2 白色粒子少量、酸化鉄粒φ1~2mm多、しまりあり、粘性強。
- 6 灰褐色 5YR4/2 黄褐色土粒φ1~2mm含む、しまりあり、粘性強。
- 7 灰褐色 7.5YR4/2 白色粒子多量、酸化鉄粒子含む。黄褐色土粒φ1~2mm含む。しまり強、粘性弱。
- 8 灰褐色 7.5YR4/2 黄褐色土粒φ1~2mm含む。しまりややあり、粘性強。
- SK37**
- 1 灰褐色 7.5YR4/2 酸化鉄ブロック含む、黄褐色土ブロックφ1~3mm少量、しまりあり、粘性ややあり。
- 2 褐灰色 7.5YR4/1 黄褐色土粒φ2~5mm多量、しまりあり、粘性強。
- 3 褐灰色 10YR5/1 黄褐色土粒少量、灰色粘土主体、しまりあり、粘性強。
- 4 にぶい褐色 7.5Y5/4 酸化鉄粒φ1~2mm少量、灰褐色土ブロック多量、しまり強。

- SE12**
- 1 灰黄褐色 10YR4/2 白色粒子多量、酸化鉄粒φ1~2mm多砂粒含む。しまり強、粘性あり。
- 2 褐灰色 7.5YR4/1 白色粒子含む。黄褐色土粒φ2~3mm少量、酸化鉄粒φ3~4mm多量、しまり強、粘性あり。
- 3 褐灰色 10YR4/1 灰色粘土主体、酸化鉄ブロック多量、黄褐色土粒φ2~3mm少量、しまりあり、粘性強。
- 4 灰色 5Y4/1 灰色粘土主体、しまりあり、粘性強。
- 5 灰褐色 7.5YR4/2 黄褐色土粒φ2~3mm含む。酸化鉄粒φ2~3mm含む。しまり弱、粘性強。
- 6 黄褐色 2.5Y5/4 砂粒多、灰褐色土ブロック少量、しまり弱、粘性強。
- 7 灰褐色 7.5YR4/2 黄褐色土粒φ2~3mm含む。酸化鉄粒φ2~3mm含む。砂粒含む。しまり弱、粘性強。
- 8 灰オリーブ色 7.5Y5/2 酸化鉄ブロック、黄褐色土ブロック多量、しまり弱、粘性強。
- 9 明黄褐色 10YR6/6 灰黄褐色土ブロック含む。酸化鉄粒φ1~2mm少量。
- 10 褐灰色 7.5YR4/1 黄褐色土ブロック含む。酸化鉄粒φ1~2mm含む。しまり強、粘性あり。
- 11 褐灰色 7.5YR4/4 黄褐色土ブロック含む。酸化鉄粒φ1~2mm含む。灰色粘土ブロック少量、しまりあり、粘性強。

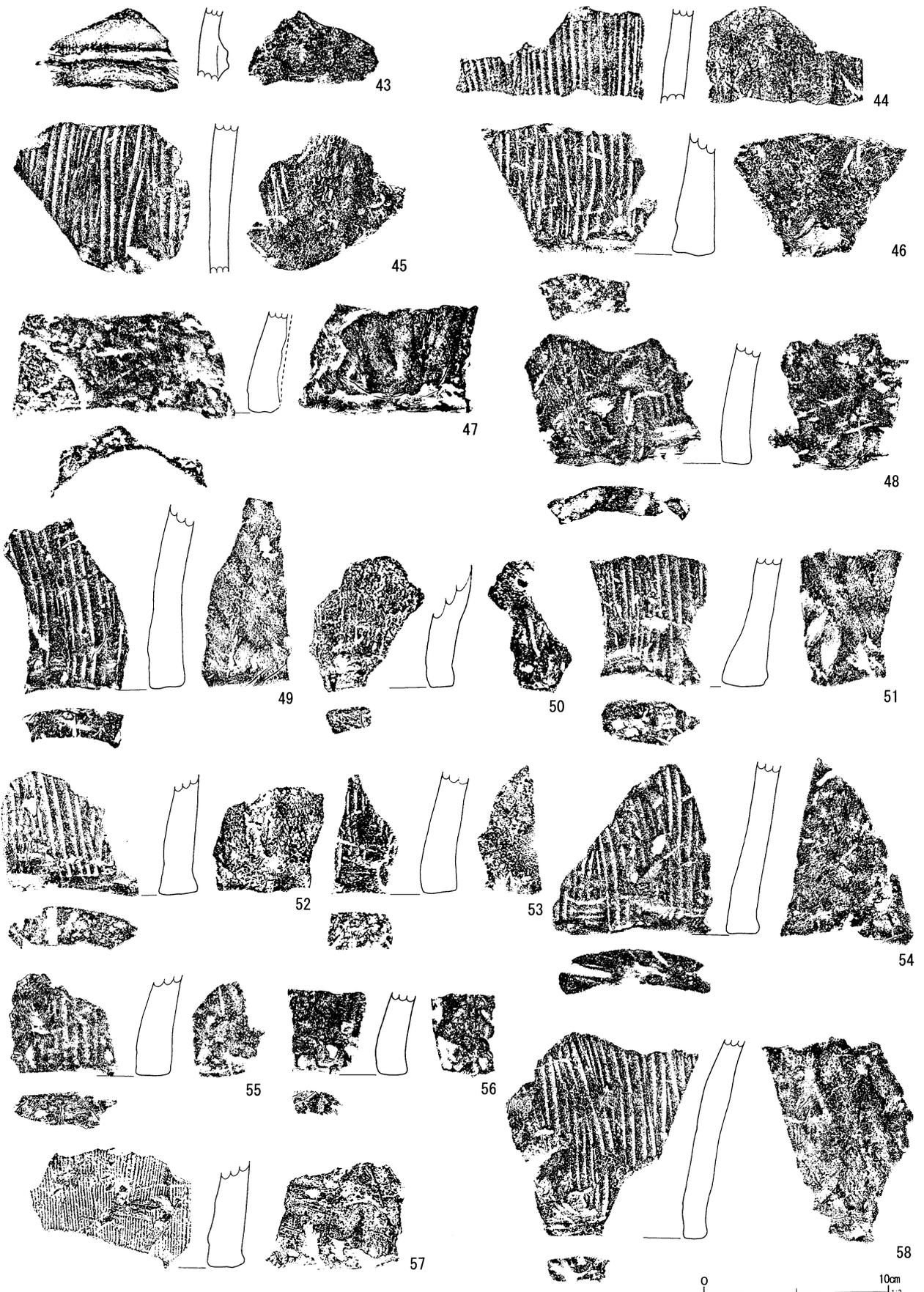
第14図 第33~37号土壌、第12号井戸跡平面・断面図



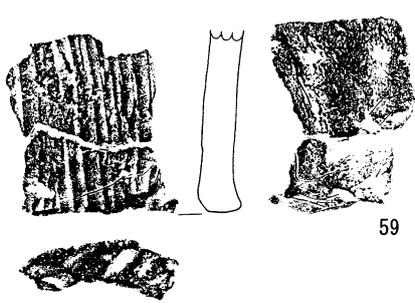
第15图 第7号沟迹出土遗物(1)



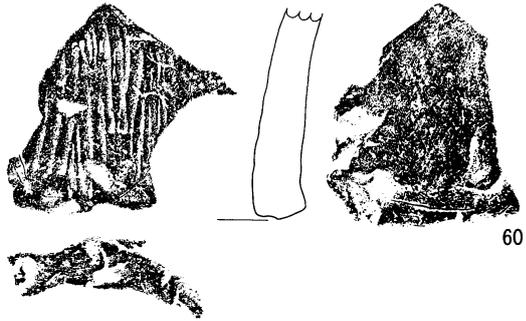
第16图 第7号沟迹出土遺物(2)



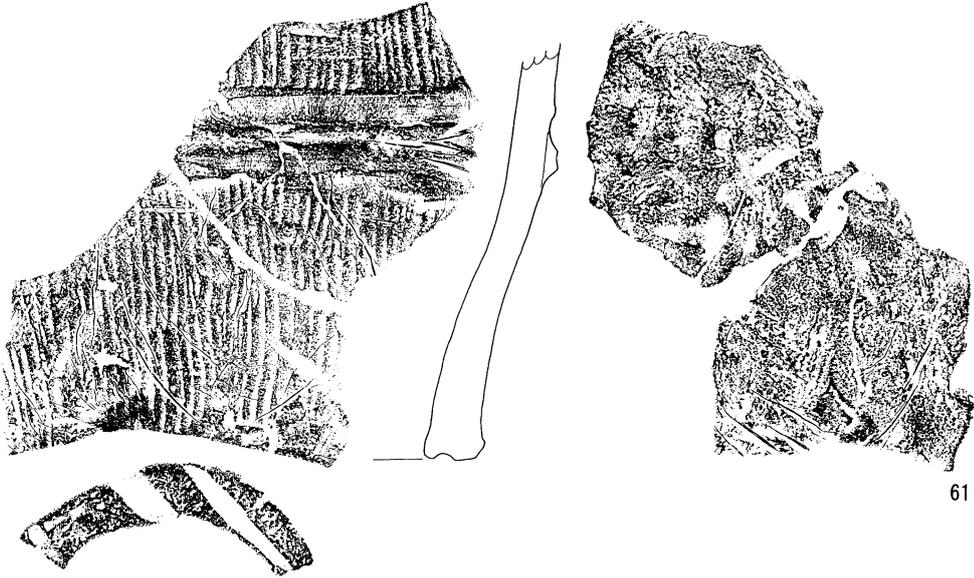
第17图 第7号沟迹出土遗物(3)



59

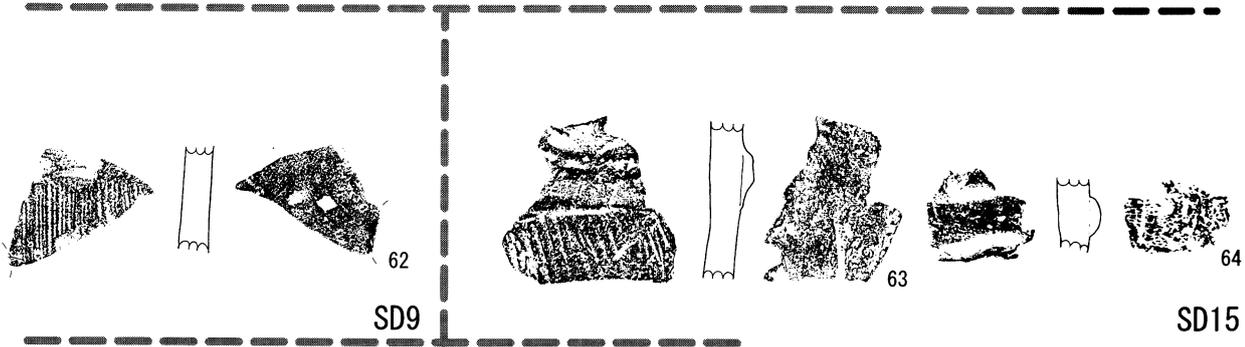


60



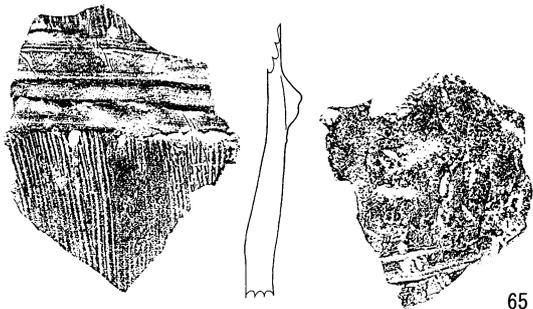
61

SD7



SD9

SD15



65

SK35



第18图 第7号沟迹出土遗物(4)、第9·15号沟迹、第35号土壤出土遗物

第4表 第7号溝跡出土円筒埴輪観察表（第15～18図）

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	調整・手法の特徴	備 考
1	朝顔	口縁部		①C②明赤褐 5YR5/8 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整の後に横方向の擦痕が施される。	
2	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①C②にぶい橙 7.5YR6/4 ③良好・硬質	12	外面はタテハケ調整で、内面はタテハケ調整の後にタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	透孔の一部が残る。穿孔後ナデ調整。
3	円筒	口縁部		①B②赤褐 2.5YR4/8 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向から強くナデる。	
4	円筒	口縁部		①B②赤褐 2.5YR4/8 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向から強くナデる。	内面に「-」のヘラ記号の一部が残る。
5	円筒	口縁部		①B②橙 5YR6/6 ③良好・普通		外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
6	円筒	口縁部	東	①B②赤褐 2.5YR4/8 ③良好・硬質		外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
7	円筒	口縁部		①A②赤褐 2.5YR4/8 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施され、下に横方向の擦痕。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
8	円筒	口縁部		①B②赤褐 2.5YR4/8 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
9	円筒	口縁部		①A②橙 5YR6/6 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部を屈曲させ、上方向からと端部を強くナデる。	内面に「-」のヘラ記号の一部が残る。
10	円筒	口縁部		①C②橙 5YR6/6 ③良好・硬質	7	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	内面に「-」のヘラ記号の一部が残る。
11	円筒	口縁部		①C②橙 5YR6/6 ③普通・軟質	6	外面はタテハケ調整で、内面はヨコナデ調整が施される。	器面の磨耗顕著。
12	円筒	口縁部	底面	①C②にぶい橙 5YR6/4 ③普通・普通	10	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部を屈曲させ、端部を強くナデる。	
13	円筒	口縁部		①B②赤褐 2.5YR4/8 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
14	円筒	口縁部		①C②にぶい橙 7.5YR7/4 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は屈曲させ、上方向からと端部を強くナデる。	
15	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整の後ナデる。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約5mmである。	突帯下端に透孔の一部を残す。半円形透孔の可能性はある。
16	円筒	体部		①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約6mmである。	
17	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通		外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜を作出し、突出の高さは約6mmである。	
18	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	突帯下端に透孔の一部を残す。
19	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	13	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整の後にナデる。突帯は下稜の突出する台形で、突出の高さは約7mmである。	
20	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整の後にナデる。突帯は台形で、突出の高さは約7mmである。	突帯下端に透孔の一部を残す。半円形透孔の可能性はある。

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
21	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通		外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約7mmである。	透孔の一部を残す。内面の磨耗顕著。
22	円筒	体部		①B②橙 5YR7/6 ③良好・普通	9	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約4mmである。	透孔の一部を残す。
23	円筒	体部	東	①B②にぶい橙 5YR7/4 ③良好・普通		外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は上稜よりも下稜が低い台形で、突出の高さは約6mmである。	透孔の一部を残す。
24	円筒	体部		①B②にぶい褐 7.5YR5/4 ③良好・普通	7	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約9mmである。	突帯下端に透孔の一部を残す。
25	円筒	体部		①C②にぶい橙 7.5YR6/4 ③良好・普通	10	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は丸みをもつ台形で、突出の高さは約5mmである。	透孔の一部を残す。
26	円筒	体部	東	①A②橙 5YR6/6 ③良好・普通		内面はナナメハケ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約5mmである。	
27	円筒	体部		①A②明赤褐 5YR6/6 ③良好・普通		内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約5mmである。	
28	円筒	体部		①B②明赤褐 5YR5/8 ③良好・硬質	5	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整の後横方向にナデる。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約8mmである。	
29	円筒	体部		①B②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約8mmである。	
30	円筒	体部		①B②明赤褐 5YR5/8 ③普通・軟質		外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	
31	円筒	体部		①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・普通		外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約7mmである。	内外面に黒色物質付着。
32	円筒	体部		①A②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通		外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	
33	円筒	体部		①A②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は丸みのある台形で、突出の高さは約4mmである。	突帯上部に連続する板端圧痕が残る。
34	円筒	体部		①C②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質		内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜をシャープに作出する台形で、突出の高さは約8mmである。	
35	円筒	体部	上層	①C②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質		内面はタテナデ調整が施され、指頭圧痕が顕著。突帯は台形で、突出の高さは約7mmである。	
36	円筒	体部		①C②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約5mmである。	
37	円筒	体部		①B②にぶい褐 7.5YR5/4 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約8mmである。	
38	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③良好・硬質		内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約7mmである。	
39	円筒	体部		①A②にぶい橙 7.5YR6/4 ③普通・軟質	10	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	
40	円筒	体部		①B②にぶい橙 7.5YR6/4 ③普通・軟質	10	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は幅広の台形で、突出の高さは約5mmである。	

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	調整・手法の特徴	備 考
41	円筒	体部		①B②にぶい褐 7.5YR5/4 ③良好・硬質		内面はナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約6mmである。	
42	円筒	体部		①B②にぶい褐 7.5YR6/3 ③良好・硬質		内面はナデ調整が施される。突帯は上稜よりも下稜が低い台形で、上稜は丸みをもつ。突出の高さは約6mmである。	須恵質。
43	円筒	体部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通		内面はナデ調整が施され、指頭圧痕が顕著。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約6mmである。	外面は黒色物質付着、内面は焼きムラ。
44	円筒	体部		①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。	
45	円筒	体部		①B②明赤褐 2.5YR5/8 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。	
46	円筒	底部		①B②赤褐 2.5YR4/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。	
47	円筒	底部		①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通		内面はタテナデ調整が施される。底面は砂粒状の圧痕が付着。	外面剥落。
48	円筒	底部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は棒状圧痕が付着。	
49	円筒	底部		①C②にぶい橙 7.5YR7/4 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は棒状圧痕が付着。	
50	円筒	底部		①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は平坦。	
51	円筒	底部		①C②にぶい橙 7.5YR7/4 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は砂粒状圧痕が付着。	
52	円筒	底部	東	①B②にぶい橙 5YR7/4 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は棒状圧痕が付着。	
53	円筒	底部		①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は砂粒状圧痕が付着。	
54	円筒	底部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。基部外面に木目圧痕が残り、底面は棒状圧痕が付着。	
55	円筒	底部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は平坦。	
56	円筒	底部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は棒状圧痕が付着。	器面の磨耗顕著。
57	円筒	底部		①B②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質	14	外面はタテハケ調整、内面はナナメナデ調整が施される。	
58	円筒	底部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。基部外面に木目圧痕が残り、底面は棒状圧痕が付着。	
59	円筒	底部	上層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は棒状圧痕が付着。	
60	円筒	底部		①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。基部はR接合で、底面は平坦。	

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	調整・手法の特徴	備 考
61	円筒	底部～ 体部		①B②明赤褐 5YR5/8 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。底面は棒状圧痕が付着。	

第5表 第9・15号溝跡、第35号土壙出土円筒埴輪観察表（第18図）

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	調整・手法の特徴	備 考
62	円筒	体部	SD9	①C②橙 5YR7/6 ③普通・普通	14	外面はタテハケ調整、内面はナデ調整が施される。	透孔の一部を残す。
63	円筒	体部	SD15	①B②にぶい赤褐 5YR5/4 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出する台形で、突出の高さは約5mmである。	
64	円筒	体部	SD15	①B②明赤褐 5YR5/8 ③普通・軟質	6	内面はナデ調整が施される。突帯は丸みを帯びた台形で、突出の高さは約4mmである。	
65	円筒	体部	SK35	①B②にぶい橙 7.5YR5/4 ③良好・硬質	13	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施され、横方向の擦痕が残る。突帯は上稜よりも下稜が低い台形で、突出の高さは約6mmである。	須恵質。

号土壙（井戸跡）と重複している。第35号土壙は長径1.15m、短径約0.8mの楕円形で、深さは約0.3mである。第36号土壙は第35号土壙の東側で切られており平面の形状と規模は不明であるが、深さは0.1mと浅い。断面の観察から第35号土壙が新しいことが明らかになった。

第35号土壙から埴輪片が出土している。

#### 第37号土壙（第14図）

R-17グリッドに位置する。第35・36号土壙、第33号土壙（井戸跡）によって南西コーナーが壊されている。平面形は南北2m、東西1.7mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。覆土中から馬一体分の骨が検出された。下顎と脚の位置から背を西にし、頭を北側に置いていたことが復元できる。本土壙は馬の埋葬施設と考えられ、第20号墳の墳丘部で周溝と接する位置にあることから、古墳と何らかの関連が想定できるがしかし、馬骨以外の遺物が出土しておらず時

期の確定が難しい。今後の調査事例の蓄積を待つて検討をくわえる必要がある。

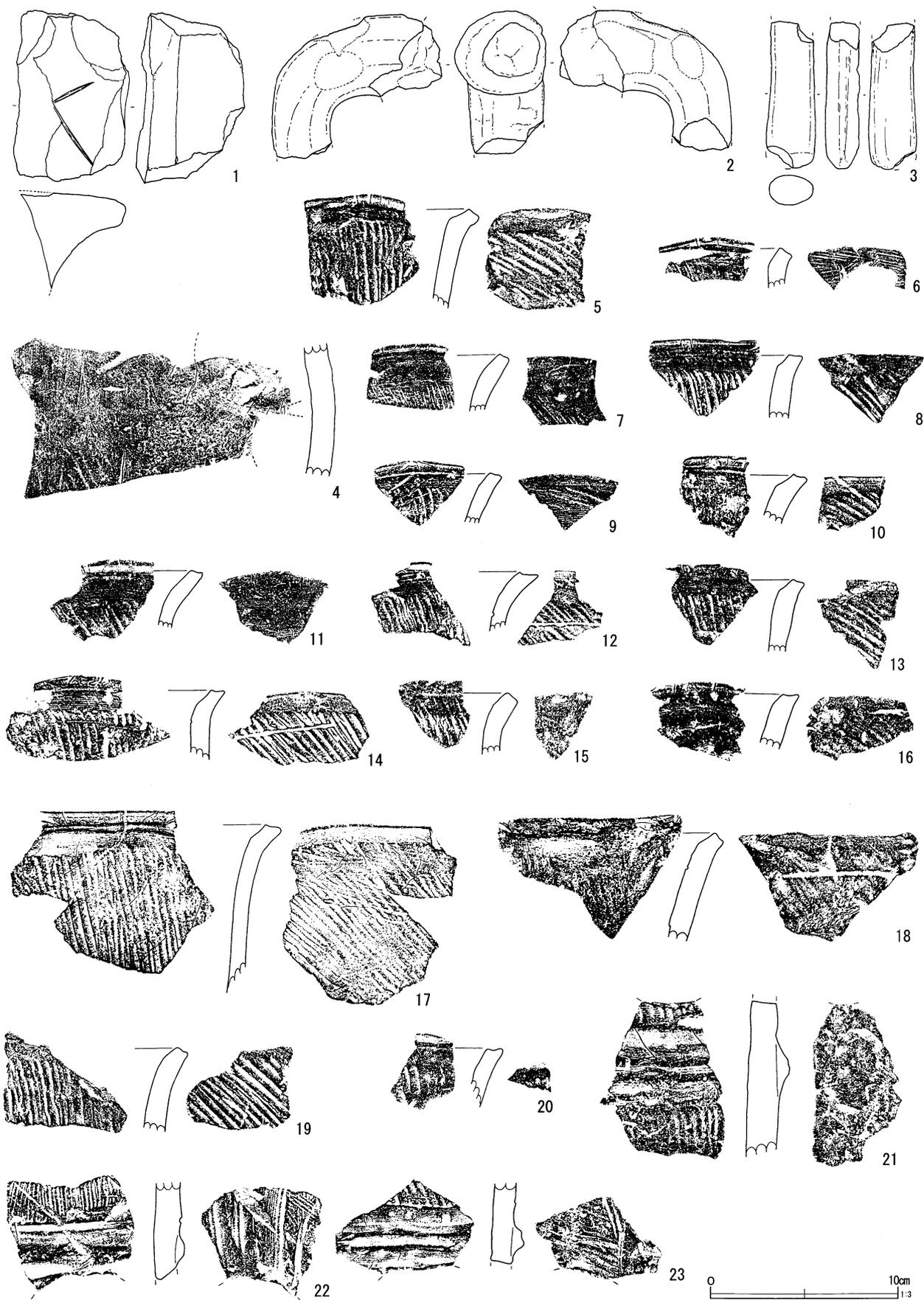
#### 第33号土壙（第14図）

R-17グリッドに位置する。調査時に土壙番号をつけているが、断面の深さから井戸跡に変更する。平面形は長径1.0m、短径0.8mの楕円形で、深さは底面まで調査していないため不明である。

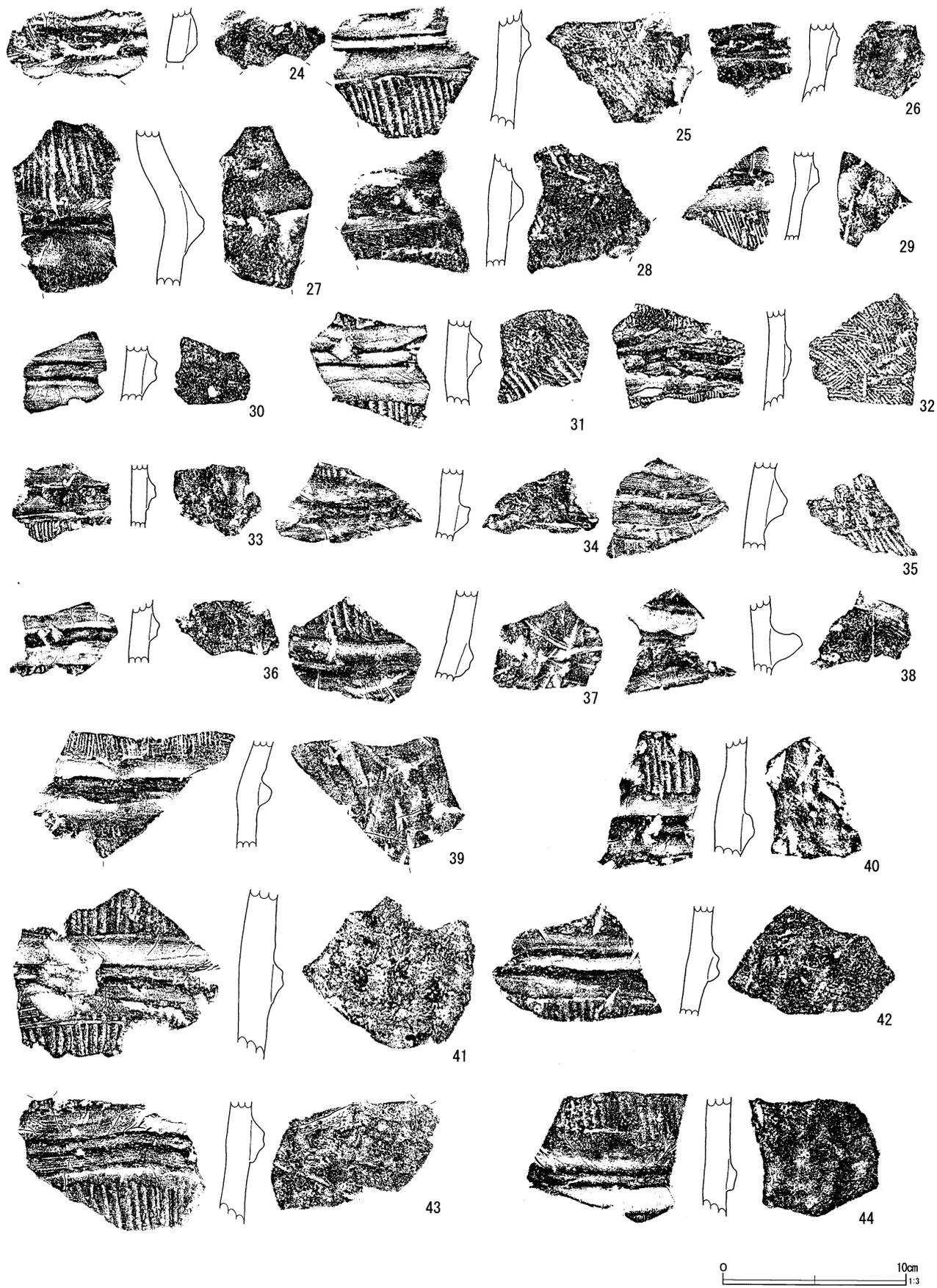
#### 第12号井戸跡（第14・22図）

R-17グリッドに位置する。平面形は径約1.8mの不整円形で深さ約0.3mである。底面に径約0.3mの円形に2段掘りされており、深さは確認面から1.3mである。

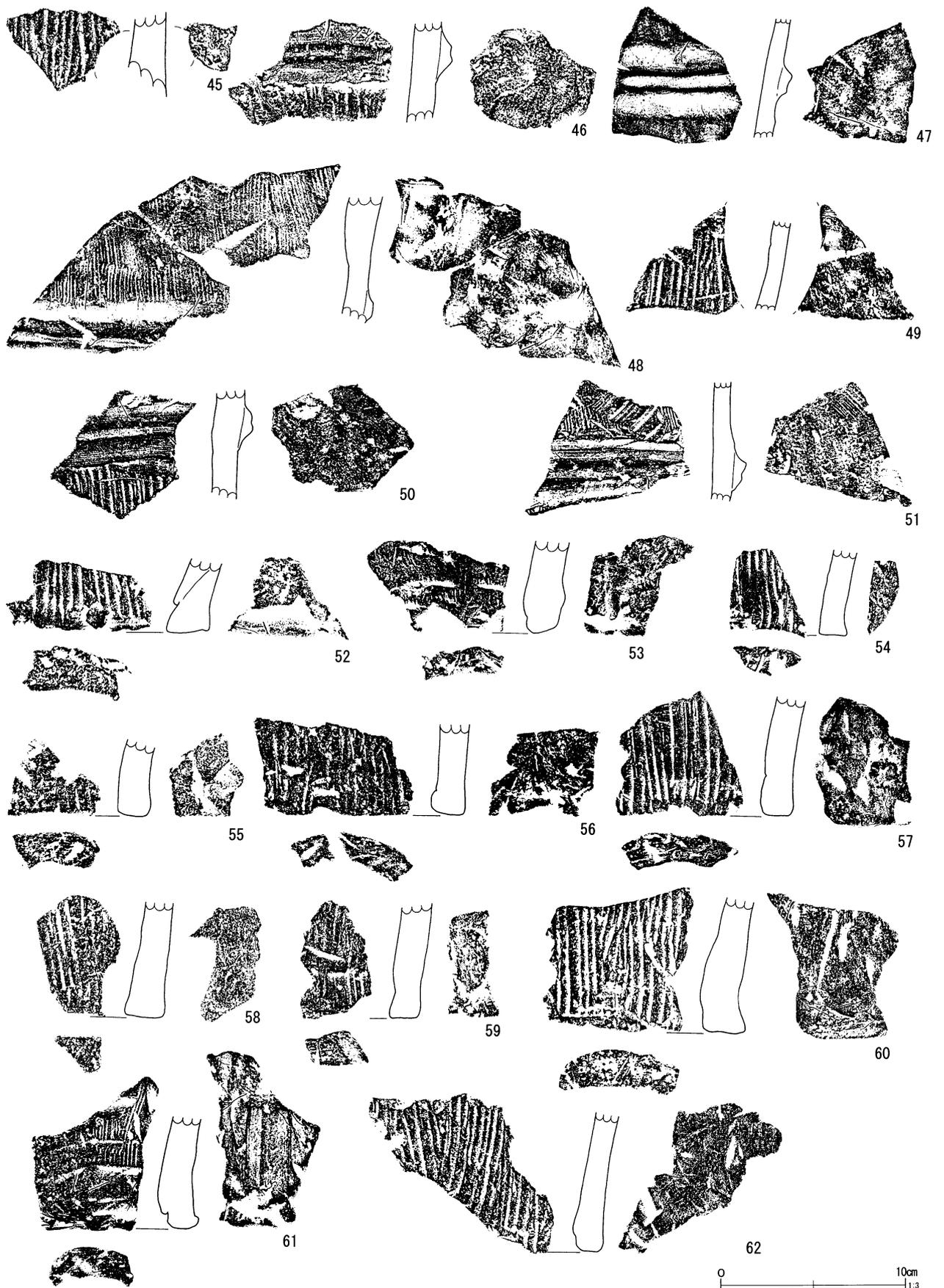
覆土中から第22図67の角閃石安山岩の礫が出土した。形状は円盤状に近く表裏両面は鑿状工具によって平坦に仕上げられており、右側面を切断するようにして平坦面を作り出している。重さは2.75kgである。



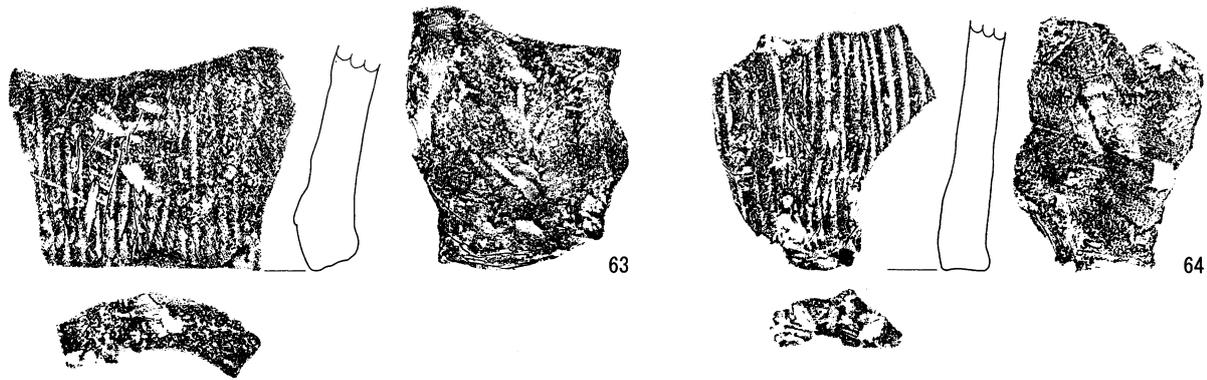
第19図 グリッド出土遺物（1）



第20図 グリッド出土遺物（2）

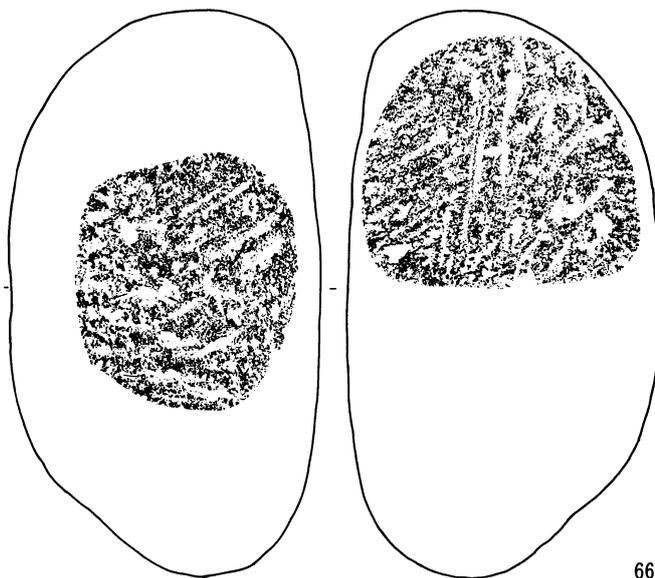


第21図 グリッド出土遺物（3）

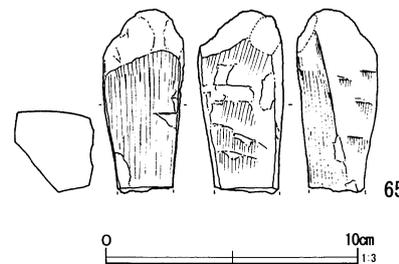


63

64

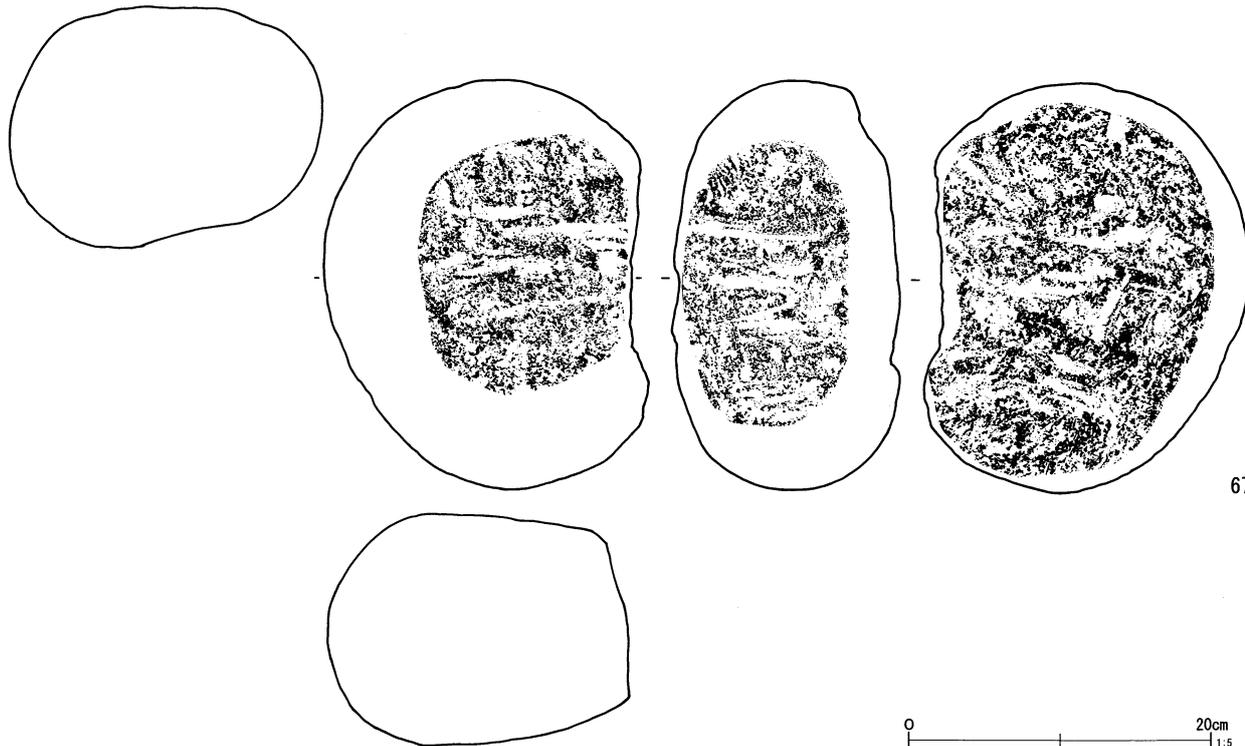


66



65

0 10cm 1:3



67

0 20cm 1:5

第22図 グリッド出土遺物（4）

第6表 グリッド出土形象埴輪観察表 (第19図)

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	製作・手法の特徴	備考
1	盾	ヒレ部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR6/6 ③良好・普通		円筒形の本体に粘土板によるヒレ部を貼付する。正面に線刻により三角文を施文する。	胎土中に赤色粒子の混入が目立つ。
2	人物	腕部	R-17G Ⅲ層	①B②にぶい赤褐 5YR5/4 ③良好・硬質		中実成形の右腕。外面はタテナデを丁寧に施す。	胎土中に赤色粒子の混入が目立つ。
3	人物	美豆良	R-17G Ⅰ層	①B②橙 5YR6/6 ③良好・硬質		粘土紐成形の棒状の下げ美豆良。ナデを丁寧に施す。	
4	不明		R-17G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整の後にナデを加え、内面はタテナデ調整が施される。図示した右端に突帯を貼付し、その下端に接して小円孔を穿つ。	馬形埴輪の尻尾付近の破片と考えられる。

第7表 グリッド出土円筒埴輪観察表 (第19～22図)

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
5	円筒	口縁部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 5YR5/8 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
6	円筒	口縁部	R-17G Ⅱ層	①C②橙 5YR6/6 ③良好・硬質	11	外面はタテハケ調整で、内面はナナメヨコハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
7	円筒	口縁部	R-17G	①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・軟質	11	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
8	円筒	口縁部	R-17G	①B②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質	5	外面はタテハケ調整で、内面はナナメヨコハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
9	円筒	口縁部	R-17G	①B②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質	5	外面はタテハケ調整で、内面はヨコハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
10	円筒	口縁部	R-18G	①B②橙 5YR6/6 ③良好・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
11	円筒	口縁部	R-17G	①B②明赤褐 5YR5/6 ③良好・普通	6	外面はナナメタテハケ調整、内面はヨコナデ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
12	円筒	口縁部	A区	①C②橙 5YR6/6 ③良好・硬質	10	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。口唇部は上方向を強くナデる。	内面に「-」のヘラ記号の一部が残る。
13	円筒	口縁部	R-17G	①B②にぶい橙 5YR6/4 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	
14	円筒	口縁部	R-17G Ⅳ層	①B②にぶい橙 5YR6/3 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部は上方向からと端部を強くナデる。	内面に「-」のヘラ記号の一部が残る。
15	円筒	口縁部	R-17G	①B②赤褐 5YR4/8 ③良好・硬質	7	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部は端部を強くナデる。	
16	円筒	口縁部	R-17G	①B②明赤褐 5YR5/6 ③良好・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
17	円筒	口縁部	R-17G Ⅲ層	①C②橙 5YR6/6 ③良好・硬質	6	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
18	円筒	口縁部	R-17G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/8 ③普通・軟質	6	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇部は上方向からと端部を強くナデる。	内面に「-」のヘラ記号が残る。長さ5.5cm。
19	円筒	口縁部	R-18G	①B②橙 5YR6/6 ③普通・軟質	7	外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整が施される。口唇端部を強くナデる。	
20	円筒	口縁部	R-17G	①B②橙 5YR6/8 ③普通・軟質		外面はタテハケ調整、内面は剥離のため調整は不明瞭。口唇端部を強くナデる。	
21	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 5YR5/8 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約7mmである。	透孔の一部を残す。右回り穿孔。
22	円筒	体部	R-17G Ⅳ層	①B②橙 5YR7/6 ③良好・硬質	12	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ・タテハケ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	透孔の一部を残す。右回り穿孔で、ナデ調整を施す。
23	円筒	体部	R-18G	①C②明赤褐 5YR5/6 ③良好・硬質	5	外面はナナメハケ調整で、内面はヨコハケ・タテナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約7mmである。	突帯の下端に透孔の一部が残る。
24	円筒	体部	A区	①B②明赤褐 2.5YR5/8 ③普通・普通		内面はタテナデ調整が施される。突帯は低台形で、突出の高さは約5mmである。	突帯の下端に透孔の一部が残る。
25	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②にぶい橙 5YR6/4 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜が低い台形で、突出の高さは約5mmである。	透孔の一部を残す。
26	円筒	体部	R-18G	①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通		外面はタテナデ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出するもので、突出の高さは約5mmである。	
27	朝顔	肩部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR7/6 ③普通・普通	5	外面はタテナデ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出するもので、突出の高さは約9mmである。	透孔の一部を残す。
28	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 2.5YR5/8 ③普通・普通		外面は磨耗が顕著である。内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約7mmである。	
29	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	11	外面はナナメタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	内面指頭圧痕顕著。
30	円筒	体部	R-18G	①C②にぶい橙 5YR6/4 ③普通・普通		内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出するもので、突出の高さは約7mmである。	
31	円筒	体部	R-18G	①C②にぶい橙 5YR6/4 ③良好・硬質	7	外面はタテナデ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出するもので、突出の高さは約8mmである。	
32	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②橙 2.5YR6/8 ③良好・硬質	14	外面はタテナデ調整で、内面は不定方向のハケ調整が施される。突帯は低台形で、突出の高さは約4mmである。	突帯のナデつけやや粗雑。
33	円筒	体部	R-18G	①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③良好・硬質	12	外面はタテナデ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	内面指頭圧痕顕著。
34	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/6 ③不良・軟質		外面はタテナデ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は上稜よりも下稜の低い台形で、突出の高さは約7mmである。	胎土中に赤色粒子の混入が目立つ。
35	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 2.5YR5/8 ③普通・普通		外面はタテナデ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約10mmである。	
36	円筒	体部	R-18G	①C②橙 7.5YR7/6 ③不良・軟質		外面はタテナデ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	
37	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 2.5YR5/8 ③普通・普通	5	外面はタテナデ調整で、内面は不定方向のナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約6mmである。	

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
38	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/8 ③良好・硬質		外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は突出度の強いもので、突出の高さは約17mmである。	形象埴輪の台部の可能性がある。
39	円筒	体部	R-18G Ⅰ層	①B②にぶい橙 5YR6/4 ③不良・軟質	12	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は丸みのある台形で、突出の高さは約7mmである。	突帯の下端に透孔の一部が残る。半円形透孔の可能性がある。
40	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約7mmである。	
41	円筒	体部	R-18G Ⅰ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約6mmである。	
42	円筒	体部	R-18G Ⅰ層	①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は下稜よりも上稜の低い台形で、突出の高さは約6mmである。	
43	円筒	体部	R-18G Ⅰ層	①B②にぶい橙 7.5YR6/4 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約7mmである。	透孔の一部を残す。
44	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR7/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	
45	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。	透孔の一部を残す。
46	円筒	体部	R-17G Ⅳ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、下端のナデ付けは粗雑である。突出の高さは約7mmである。	
47	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は上稜と下稜の2稜を作出するもので、突出の高さは約6mmである。	
48	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR7/6 ③良好・硬質	11	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約5mmである。	外面の一部に焼きムラ。
49	円筒	体部	R-17G Ⅲ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整が施される。	透孔の一部を残す。
50	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整が施される。突帯は台形で、突出の高さは約6mmである。	
51	円筒	体部	R-17G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	11	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整が施される。突帯は上稜よりも下稜が低い台形で、突出の高さは約7mmである。	
52	円筒	底部	R-18G Ⅱ層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。基部下端内面に木目圧痕がみられる。底面は平坦。	
53	円筒	底部	R-17G Ⅱ層	①B②にぶい橙 5YR6/4 ③普通・普通		外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は凹凸がある。	外面の磨耗顕著。
54	円筒	底部	R-17G	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はナデ調整が施される。底面は凹凸がある。	
55	円筒	底部	R-17G Ⅲ層	①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通		外面はタテハケ調整、内面はナデ調整が施される。底面は平坦である。	
56	円筒	底部	R-17G Ⅱ層	①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面に棒状圧痕がある。	胎土中に赤色粒子の混入が目立つ。

番号	器種	部位	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケ メ	調整・手法の特徴	備考
57	円筒	底部	R-17G II層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はナデ調整が施される。底面は平坦である。	
58	円筒	底部	R-17G	①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は平坦である。	
59	円筒	底部	R-17G II層	①B②明赤褐 2.5YR5/6 ③普通・普通	6	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は平坦である。	胎土中に赤色粒子の混入が目立つ。
60	円筒	底部	R-17G	①B②橙 5YR6/8 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面は平坦である。	
61	円筒	底部	R-17G III層	①B②橙 7.5YR7/6 ③普通・普通	14	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面に棒状圧痕がある。基部の接合はR接合である。	
62	円筒	底部	R-17G II層	①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。	
63	円筒	底部	R-17G III層	①B②橙 5YR6/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整が施される。底面に棒状圧痕がある。	
64	円筒	底部	R-17G II層	①B②明赤褐 5YR5/6 ③普通・普通	5	外面はタテハケ調整、内面はナナメナデ調整が施される。底面に棒状圧痕がある。	

#### 4. グリッドの遺物

グリッド（第19～22図）から埴輪片を主体に遺物が検出された。

1～3は形象埴輪の破片である。1は正面が平坦でX字状の沈線が施されている。左側面は円筒部との接合面と思われるが大きく欠損している。2は人物埴輪の肩から腕の部分になる。3は上端を欠損している。棒状の下げ美豆良であろう。

5～64は円筒埴輪である。大半が第20号墳に帰属するものと考えられる。

65は砥石で下半部を欠損する。重さは89.1gである。

66・67は加工痕を有する礫である。石室に用いられた礫と考えられる。第17号溝跡、第12号井戸跡から出土している。

# V まとめ

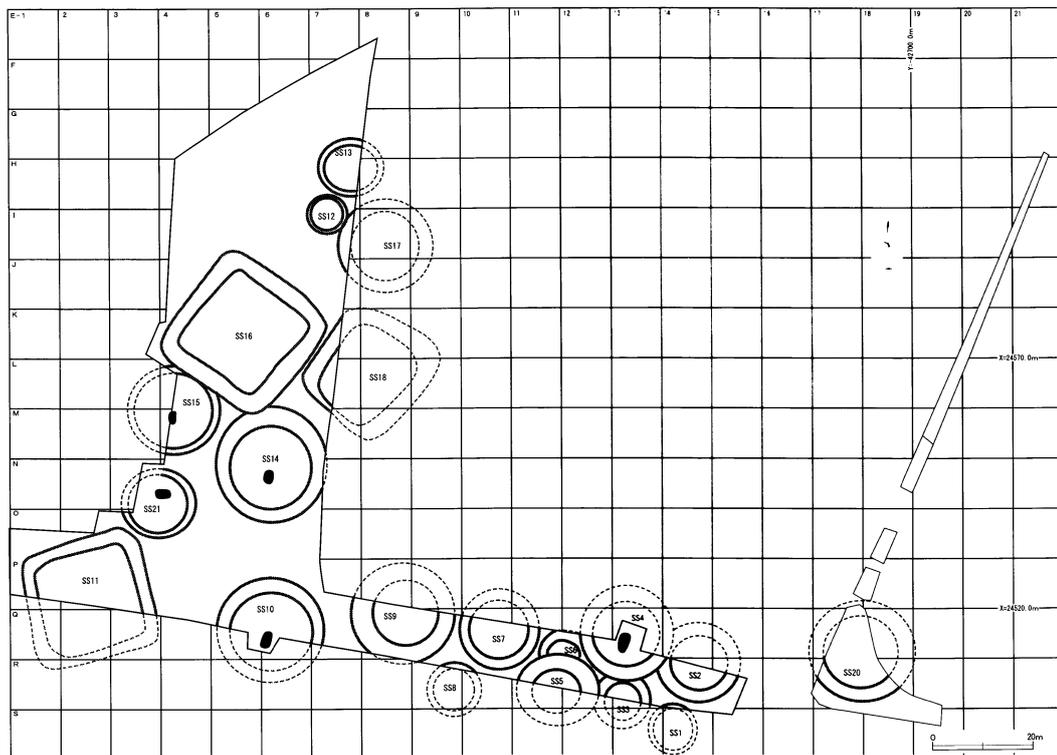
## 飯塚古墳群の概要

飯塚古墳群は、利根川と小山川の合流点の東に広がる妻沼低地北東部に位置する。これまでに妻沼西部工業団地の造成工事などに伴い数次にわたって発掘調査が実施され、20基の古墳跡が確認された。一辺25mを越す3基の大型方墳を中心に中小の円墳からなる群構成に大きな特徴が認められる。古墳群の西側には隣接して8世紀後半から10世紀まで長期間にわたって営まれた集落跡である飯塚北遺跡があり、方形区画施設や大型掘立柱建物群、多量の施釉陶器が出土している（山本2005）。

古墳群の形成過程については、出土した土器や円筒埴輪の特徴から5世紀末葉から6世紀初頭に築造を開始した、いわゆる「古式群集墳」として理解される。さらに7世紀前半には角閃石安山岩削石積の胴張形横穴式石室をもつ円墳があり、「新式群集墳」へと連続することが明らかにされている（岩瀬1999）。しかし、方墳の築造年代については周溝の切り合い

関係などから円墳よりも後出するものとされており、年代的位置づけは明確にされていない。最近の調査の進展に伴い妻沼低地周辺では、中期後半における方墳（周溝墓を含む）の築造を契機に、連続して中小の円墳が営まれる古墳群の存在が、深谷市戸森松原遺跡、岡部町原ヶ谷戸遺跡・四十塚遺跡、熊谷市田谷遺跡などで確認されている。今後、当古墳群の方墳に関しても、その性格をめぐって大きな問題になると思われる。

周辺における古墳群の分布は、北東約1.5kmに位置する径約30mの円墳である熊谷市摩多利神社古墳などの有力墳をはじめとして、低地部中央を東流する福川流域の自然堤防上には西から深谷市上増田古墳群、熊谷市道ヶ谷戸古墳群・上江袋古墳群・西城切通古墳群・西城入胎古墳群・長安寺古墳群・王子古墳などの比較的小規模な古墳群が点在した様相を示している（塩野2004）。



第23図 飯塚古墳群概略図 (S=1/1,500)

## 第20号墳について

今回報告した第20号墳は、現状で確認されている古墳群の分布範囲の東端に位置し、県道を隔てた西側には第1・2号墳が隣接している。古墳群の西から北西への広がりには埋没谷によって飯塚北遺跡と画されているのに対し、北東から南にかけては調査範囲が制限されているため、古墳の広がりには明確でない。しかし、備前渠に沿った調査区における密集した占地状況からすれば、かなり限定された空間へ累代的な築造がなされた可能性が大きい。

第20号墳は後世の攪乱により遺存状態はあまり良好でなかったが、周溝と墳丘の一部が残されていた。調査の結果、墳丘径約20mの円墳に復元され、周溝から円筒埴輪や土師器片が出土している。遺存した墳丘基底には埋葬施設の痕跡は確認されなかったが、断面観察の所見によれば地山層の上位に水平堆積を示す旧表土層が広がり、その上に層厚の薄い暗褐色シルト及び褐色シルトを入念に積み上げた墳丘築成状況が読み取れる。横穴式石室の構築に対応するような明確な硬化面等は確認されていないことから、堅穴系の埋葬施設であった可能性が高い。しかし、周囲の井戸跡や溝跡から手斧状工具によって三面を加工した角閃石安山岩の削石が出土していることからすれば、周辺に横穴式石室墳の存在を予想させる。

遺物は、南西側周溝の覆土上層からほぼ完形の土師器片が正位の状態で出土した。また、周溝覆土から少量の円筒埴輪片が出土しており、埴輪を伴う古墳であることが知られる。しかし、円筒埴輪の大半は墳丘南端部付近の攪乱土中と重複する第7号溝から最も多く出土した。

**埴輪：**円筒埴輪は小破片が多く、全体の器形を復元することのできる資料はないが、これまでの調査で埴輪を出土している第7・9号墳では2条突帯3段構成の円筒埴輪に限られていることから、本墳の場合も同様の規格品であったことが想定される。

次に、円筒埴輪の特徴について説明する。ここで

は資料点数に限りがあるため厳密には一括性に欠けるが、第7号溝跡やグリッド出土のものも参考にしながら記述したい。

口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、口唇端部を強くナデるものが多い。特徴的なものとして口唇部を上方向からと端部を強くナデるものがある。

突帯は、上稜と下稜の2稜を明確に作出するものが主体である。その中でも上稜よりも下稜が低い台形（a類）、下稜よりも上稜が低い台形（b類）、台形（c類）に大きく分けられる。そのほかに断面三角形や丸みをもつもの、突出度の高いものなどイレギュラーなものも若干含まれる。また、突帯上部に連続する板端圧痕を残す破片が認められ注意される。

透孔は全体の形状の分かるものはないが、円形を基本とする。中には突帯直下に上辺を直線的に切り込んだ、半円形もしくは不整円形の透孔が存在したようである。

基部はR接合のものが2点確認された。また、基部の内外面に木目圧痕を残すものが、それぞれ確認されている。底面は概ね平坦であるが、棒状圧痕や砂粒の付着するものもある。底部調整は図示した破片の中には確認されていない。

法量は残りの良い破片から、底径約11.0cm、第一段（最下段）幅約12.0cmを測り、比較的小型のものと推定される。外面はタテハケ調整、内面は口縁部から上半部にかけてナナメハケないしヨコハケを施し、下半部は縦方向の指ナデを主体とする。中には突帯の貼付時の指頭圧痕が顕著なものもある。ハケ工具は2cm当たり5～6本の特徴的な粗いハケメと9～10本の細かいハケメの二種に大きく分けられ、前者が主体を占める。

ヘラ記号は、口縁部内面に「-」の線刻をもつものが多く認められ、外面に施すものはない。

胎土は角閃石、白色粒子、赤色粒子、小礫などを含むものが多い。焼成は全体に良好で、須恵質に焼き上がったものも若干ある。色調は橙色と明赤褐色

を基調としている。

このほかに朝顔形埴輪や形象埴輪の破片もわずかであるが出土している。いずれも断片的であり具体的な内容は明確でない。形象埴輪は、棒状の下げ美豆良や中実成形の腕部などの人物埴輪の破片と、盾面に鋸歯文を線刻した盾形埴輪のヒレ部の破片が検出されている。

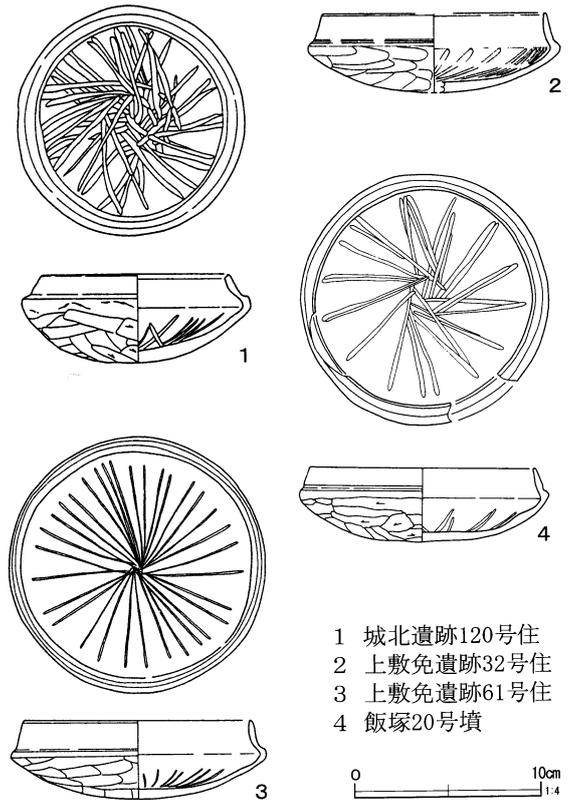
このように第20号墳出土の円筒埴輪の中にはプロポーションの判明するものはないが、最下段の伸長化が明確でないことから、埼玉県の円筒埴輪について形態的变化を基軸に4期区分した山崎武氏の円筒埴輪編年の概ねⅡ期に比定することができる(山崎2000)。年代的には6世紀前葉から中葉の年代が与えられ、前述した第7・9号墳に後続する段階に位置づけられる。

**土器**：須恵器の坏身を模倣した口縁部が内屈する土師器坏(第24図4)が出土している。その特徴は、体部内面にやや疎らな放射状の暗文を施す。口径12.0cm、器高4.0cmを測り、ほぼ完形である。口縁部の立ち上がりは短く、端部を丸く収める。段部は既に形骸化が進み、木口状工具によって沈線状に作出され、体部は浅く扁平である。

こうした有文内屈口縁坏の類例を探せば周辺では深谷市城北遺跡第120号住居跡(山川1995a)、同上敷免遺跡第32号、第61号住居跡(瀧瀬・山本1993)等から出土している。

城北遺跡第120号住居跡例(第24図1)は口径10.0cm、器高4.7cmと小振りで、口縁端部を内そぎ状に収め、段部を明瞭に作り出している。城北遺跡例は榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)の降下直前段階のTK47~MT15型式期に比定されており、須恵器坏身の形態を忠実に模倣した内屈口縁坏の初現期に位置づけられる。埼玉県北部における鬼高式土器では須恵器坏蓋を模倣した、いわゆる模倣坏が優勢であるが、こうした内屈口縁坏も模倣坏の定型化段階にさほど遅れることなく出現していたことを示す。

第20号墳例に比較的近い特徴を示すものとして上



第24図 有文内屈口縁坏の類例

敷免遺跡第32号住居跡(第24図2)、第61号住居跡(第24図3)例が挙げられる。

上敷免第61号住居跡例は、口径12.3cm、器高4.2cmである。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く収める。第20号墳例と比較すると、口縁部の形態に若干差異が認められるが、形骸化した段部の特徴などは類似していることから、ほぼ同時期に位置づけられる。伴出土器には、口径13.5~14cmの有段口縁坏と砲弾同形の長胴甕がみられる。6世紀前半まで遡らせることは難しい組み合わせから須恵器のMT85~TK43型式期、6世紀第Ⅲ四半期を中心とする時期に位置づけられる。

第20号墳の築造年代について円筒埴輪と土師器坏を取り上げて検討した。その結果、両者の年代観には若干の時期差が認められ、同一視することはできない。ここでは、より築造当初に近い円筒埴輪の年代観を支持して6世紀中葉でも古い段階に位置づけしておく。土師器坏については築造もしくは追葬時期の一端を示しているのであろう。

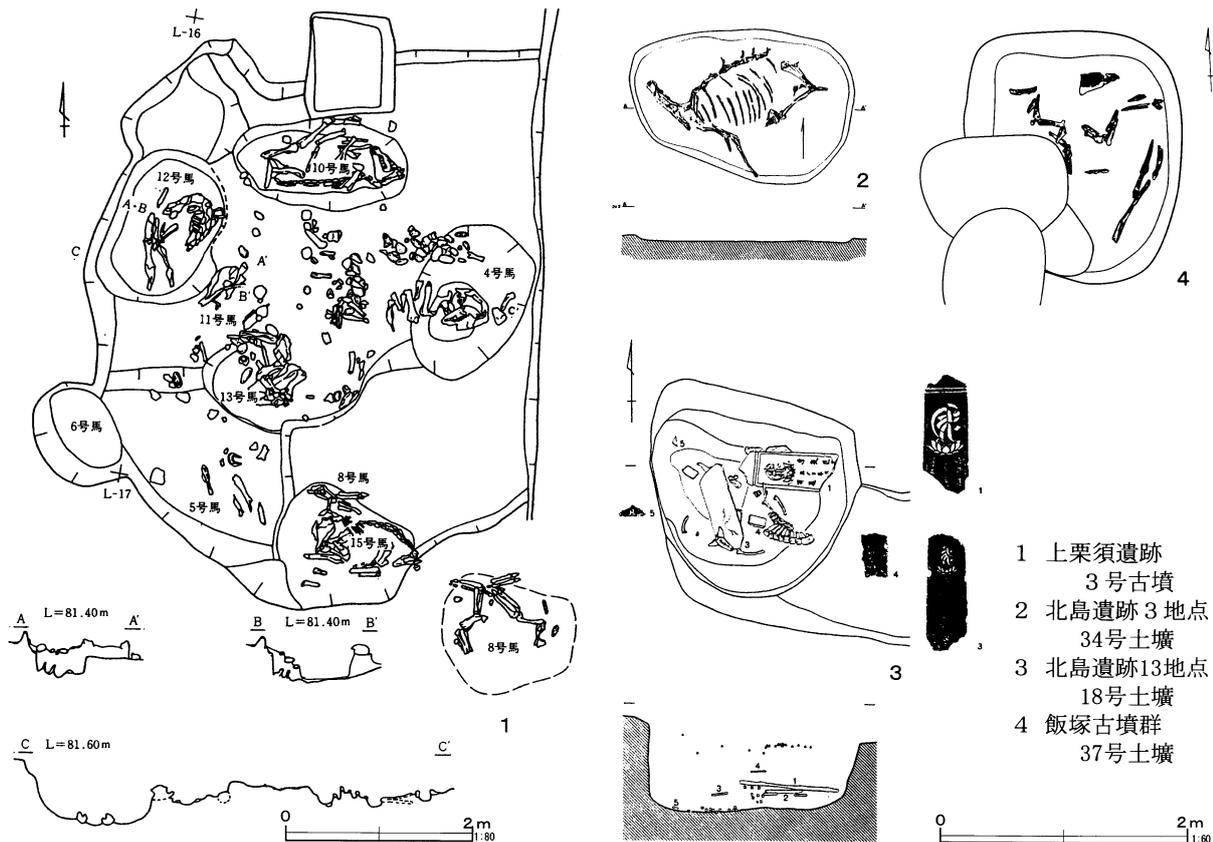
## 馬埋葬土壌墓について

第20号墳の墳丘南縁において、周溝に接するよう掘り込んだ第37号土壌に馬が埋葬されていた。隅丸方形の2.0×1.7mの土壌に、馬歯馬骨の出土状態から頭を北にして、南北に体を横たえ肢を東側に置いた姿勢で埋葬されていたと復元される。また、後肢はまっすぐ前方に伸ばし、前肢は緩やかに屈曲していたようである。

馬骨以外に伴出遺物がなく、時期を特定することはできない。しかし、「河内の馬飼」に知られるように古墳時代中期以降、河内、信濃、上毛野などでは渡来系氏族によって馬の飼育が積極的に導入されていたことが、渡来系遺物や馬の殉葬墓などの集中した分布状況から指摘されている(桃崎1993)。また、埼玉県内でも古墳時代の集落跡や古墳から出土した馬歯馬骨の出土例が僅かながら報告されている。とりわけ妻沼低地の深谷市城北遺跡、岡部町砂田前遺跡では住居跡から馬歯馬骨が検出されており、埼玉政

権によって掌握された馬飼の存在が想定されている(山川1992・1995b)。一方、古墳では神川町南塚原29号墳・31号墳の周溝外縁や周辺に付設された土壌から馬歯が出土した例(金子1996・坂本2003)や岡部町四十塚遺跡10号墳の周溝内土壌から轡とともに馬歯が出土した例(鳥羽2003)などが古墳に伴う馬の殉葬墓として知られている。ただし、馬歯や馬骨等は出土していないが東松山市古凍4号墳(江原1999)、朝霞市入部・峡遺跡3地点(荒井ほか2000)でも古墳の周溝やその周辺から馬具を伴う土壌が検出され、馬具を装着した状態で馬を供えた可能性が指摘されている。

このように埼玉県内における古墳時代の馬匹文化の痕跡は徐々にではあるが蓄積されつつある。しかし、このような状況の中で第37号土壌に埋葬された馬が、はたして古墳に直接伴うものであるのか、これだけの状況証拠だけでは判断に苦慮する。だが、その検出状況を勘案すれば墳丘を意識した占地であ



第25図 馬埋葬土壌墓の類例

ることはまちがいない。こうした古墳の墳丘を二次的に利用した例として、藤岡市上栗須遺跡3号古墳において江戸時代に古墳の墳頂部に馬を埋葬した22基の土壙墓が知られている（津金澤1989）。

管見にふれた馬埋葬土壙墓には、熊谷市北島遺跡第3地点第34号土壙（浅野1989）、同第13地点第18号土壙（大谷1991）、岡部町大寄遺跡第4号土壙墓（福田2002）がある。これらの土壙墓の特徴は土壙内に馬1体だけが埋葬され、埋葬姿勢もある程度ははっきりわかる場合が多い。いずれも時期は特定されていないが、このうち北島遺跡第13地点第18号土壙では嘉暦三（1328）年銘の板石塔婆片が伴っており、中世以降の所産であることを示唆する。

ところで、北島遺跡から出土した古代牛馬骨について詳細に分析した山川守男氏は、牛馬骨の出土状況はほとんどが祭祀行為及び解体後の投棄によるものであり、解体されないで埋葬されることは希で

あったと指摘する（山川2004）。つまり、北島遺跡では『養老厩牧令』の斃れ馬牛に関する処理規定にみられるように、死後解体して皮と肉以外にもさまざまな形で有用資源として利用されていたことを雄弁に物語っている（松井1987、久保・松井1999）。ここでは古墳との関連性をまったく否定する訳ではないが、古代における牛馬利用の一般的なあり方を傍証として、馬埋葬土壙墓の多くは中世以降の所産である可能性を考えておきたい。

こうした馬の埋葬のあり方に前近代社会における人と馬との関わり的一端が反映されていると言える。馬は必ずしも武力の手段としてのみ利用されたのではなく、それ以上に物資の運搬や農耕力役として広く普及し、日常的にその役割が大いに期待されていたのである。それ故に大切に飼育され、死してもなお丁寧に埋葬されたのであろう。

#### 引用・参考文献

- 浅野晴樹 1989 『北島遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集  
荒井幹夫ほか 2000 『貝塚山古墳とその時代－富士見市と周辺古墳文化－』 富士見市立水子貝塚資料館  
岩瀬 譲 1999 「妻沼町飯塚北・飯塚古墳群の調査」平成10年度第4回公開講座資料 埼玉県立埋蔵文化財センター  
江原昌俊 1999 『古凍14号墳（第1・2次）』 東松山市文化財調査報告書第23集  
大谷 徹 1991 『北島遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集  
金子彰男 1996 『青柳古墳群 南塚原支群Ⅱ』 神川町教育委員会文化財調査報告第14集  
久保和士・松井章 1999 「家畜<その2－ウマ・ウシ>」『考古学と動物学』 考古学と自然科学② 同成社  
坂本和俊 2003 「檜前馬牧設置の前史」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』 纂修堂  
塩野 博 2004 『埼玉の古墳 [大里]』 さきたま出版会  
瀧瀬芳之・山本靖 1993 『上敷免遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集  
津金澤吉茂 1989 『上栗須遺跡 下大塚遺跡 中大塚遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第88集  
鳥羽政之 2003 『四十坂遺跡』 岡部町遺跡調査会報告書第11集  
福田 聖 2002 『大寄遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集  
松井 章 1987 「養老厩牧令の考古学的考察－斃れ馬牛の処理をめぐって－」『信濃』 第39巻第4号  
桃崎裕輔 1993 「古墳に伴う牛馬供犠の検討」『古文化談叢』 第31集  
山川守男 1992 「古墳時代馬小考」『研究紀要』 第9号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
山川守男 1995a 『城北遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集  
山川守男 1995b 「北武蔵の古墳時代馬飼養地域」『研究紀要』 第12号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
山川守男 2004 「古代牛馬痕跡の一樣相」『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集－』 北武蔵古代文化研究会  
山崎 武 2000 「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』 第4号  
山本 禎 2005 『飯塚北遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第306集